

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第180号（2021年5月）・十五周年記念号



白井啓治

（十九）大きなモグラ叩きでは…

（2009年4月16日）

『見渡せば思ふ思ふふるさとの風』

一切の仕事を辞め、何もしないで呆けていようと石岡に越してきてしばらくは、こんな一行を口に呟きながら、葉津という名のパグ犬を抱いて、雑木林を散歩して過ごしていた。

ところが越してきて三年目に葉津が悪性腫瘍で急死した。そうしたら急に身辺が騒々しくなってしまう。この雑文に絵を描いてもらっている兼平さんや、一緒に劇団を始めることになった聾女優の小林さんとの出会いが大いに係わっているのであるが、最近ではのんびり一行の文を呟いている暇も与えられない。

兼平さんや小林さんとは、ふるさと起こしの塾を手伝うことで知り合ったのであったが、逼塞する街を眺めていて思ったのは、元気にするためにインパクトのある大きなことばかりを考えて、本当にやらなければならない足元の小さな改善していない事であった。

このふる里の現状の逼塞は、大きなことが要因で

起こっているのではなく、散満してある小さな問題を放置することによって生ずる相乗作用で引き起こされている逼塞であるといえる。この事実を街の有力者たちは何時になったら気付くのだろうか、大袈裟に言うところ心痛めている。



（絵：前川幸三様）

先日の事である。心痛めなければならない同様の事件に出会ってしまった。今年、ある協会の全国大会が茨城県で開催されるのであるが、それにちよつとした係わりが生じ、その係わりの中で問題の見えていない事があったのでクレームを言ったのであった。ところが去年もこうしてきたとある意味開き直られた。それで、大会事務局というのは例年に同じというのではなく、些細なことでも改善していくことが、その重要な役割であると叱責したのであったが、この話が終わった後、事務

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府4-3-32（木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

（本稿は故白井啓治氏が常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘り掲載されたエッセイを載せています。）

局責任者から僭越ながら、今回我々は今までにならぬ改革を進めた、というような事を言われた。しかし、大きな目立つ改革を自慢するような言には卑猥な自己顕示しか感じられなかった。

大きなモグラ叩きは、また直ぐに次のモグラが顔を出すのである。何かを変えようと思えるのであれば、大を志向せず先ずは足元の小さな問題の改善に目を向ける事の重大さを考えてもらいたいものである。これは上に立つ者の責任でもある。

十五周年をむかえて

木村 進

会報誌・ふるさと“風”は今月で満十五年、第180号を迎えました。これもひとえに地域をはじめ全国各地で応援してくださる読者の皆様のおかげだと、改めて感謝を申し上げます。この会の目的は、最初のタイトルにもありますように「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」ということです。そして、この会を立ち上げていただきました脚本家の白井啓治さんが今から2年前に急に志半ばでお亡くなりになり、会存続の危機でもあったのですが、残されたメンバーで何とかその後の継続を決め、コロナ渦の中でも当初の目標である十五年の節目を迎えることができました。また、この会には2つの活動の柱がありました。一つはこの会報誌の発行や書籍づくりなどで、もう一つは、師・白井啓治氏が嚆矢の舞い人・小林幸枝さんと共に立ち上げた朗読舞（手話舞）「ことば座」の活動です。最初の一つの拙いながらも継続はできましたが、二つ目の朗読・舞いの活動は後を継げる者がいないため現在休止中です。「常世の国の恋物語百」もまだ半分にも達していません。とても残念なことですが、いつかまた同じ思いの人が現れることを願って止みません。前回の満十二年（3年前）に白井啓治さんが書いた文の一部を次に載せます。

『ふるさと風、十二年を迎えて』白井啓治

（ふるさと風 第14号 2018年5月より）

これまで何度か紹介してきたが、ふるさと風の

会は、2006年6月に、2004年6月に始まった町おこし活動、ふるさとルネサンス事業の一つであった「民話ルネサンス講座」の第一期受講生と立ち上げたものである。

講座には、十数名の受講者がいたが、第一期生で最後まで残ったのは、打田升三さんと兼平智恵子さんの二名であった。講座の講師を引き受けた時から、座学をするつもりはなかったのですが、自分で題材を見つけて物語をルネサンス出来る人がそれ程育つとは考えていなかった。少数でいいからと思っただけだったが、最後まで受講したのが二名であったことには、正直さみしい思いであった。

しかし、脚本家仲間から「そんな田舎の教室で二名も卒業なんて出来過ぎだぞ」と言われたのであった。よくよく冷静に考えれば、延べにして十数名の受講生の中から二名も最後まで残るというのは驚愕というべきであろう。しかも座学講義ではなく、自ら題材を探し、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造をしていくのであるから、二名残ったというのは、ルネサンス事業としては出来過ぎというべきであろう。

小林幸枝さんは、打田さん、兼平さんから一年遅れで、朗読教室の方へ手話朗読の出来る人をとの募集にいられたのであった。嚆矢である小林さんと、最初に面接した時に、小生の知る手話の概念から飛び出した、舞台映えたスケール感のある手話動作に驚き、大変な人材に巡り合ったものだ、「明日からいらっしやい」と教室を離れて内弟子として迎えたのであった。そして、世界初の朗読を主旋律とした手話舞を完成させたのである。ふるさと風の会（スタートはふるさとルネサンスの会）に半年遅れてふるさと風の会の兄妹として手話舞

を軸にした劇団ことば座を立ち上げ、常世の国の恋物語百への挑戦をスタートさせたのであった。石岡生まれの手話舞は、NHK水戸の取材番組にも紹介されている。

ことば座の舞台は、小林さんの演じる手話舞と兼平智恵子さんの描く「常世の国の五百相」を背景に演じられる新しいふるさと文化資産であると思えるものである。東京のシアターカイでの公演においても、小林の演じる手話舞と舞台装飾としての五百相は高い評価をいただいた。

当会報「ふるさと風」がここまで継続できたのは、多くの読者の支えがあったからであり、加えてふるさと運動の先達者の方達の暖かい助言や後押しのおかげである。

中でも旧八郷町の時代に、「遊」というふるさとを十年にわたって発行されてきた合田寅彦兄、そして合田兄の紹介で面識を得、その後深い交流を頂いている美浦村の元村長市川紀行兄には大きな力を頂いた。

会報を「ふるさと風」に改称して間もなくの頃、合田兄より一度皆さんとお出でくださいとお誘いを受けた。その時に「出る杭は打たれるけれど、うんと高い杭を立てれば打たれることはないの、うんと高い杭を…」とお話を頂き、以後出来るだけ高い杭を立ててやろうと決めたことを今でもよく思い出す。

「ふるさととは何か」と問われれば、私は「ふるさととは物語の降る里」と即答する。そしてそこに「恋の降る里」と併記する。暮らしとしての物語の降らない里は亡びゆくだけ。そして、恋の降らない里には、次代を継ぐ若者たちが集うことはない。物語の、そして恋の降らない里はただ亡び

ゆくのみである。

歴史とは、事実を記録したものを言う。この石岡を歴史の里と言うのであれば、自分たちの国（ふる里）の事実を検証・記録して、歴史認識の里ではなく歴史の里に戻して自慢することが真に求められていることであろう。

緩やかな流れの時代を断ち切って誕生した明治と言う時の都合によって構築された嘘を「伝統」と言うのをそろそろ止めなければならぬ。

民話ルネサンス講座にはじまった「ふるさと風の会」であるが、伝承されていく民話とは、そこに暮らしの道標が内在しているからだと言うことが出来る。道標の内在していない物語には、伝承する意義はなく、振り向かれることもなく消滅するのみである。民話とは、昔を懐かしむための物語ではなく、今を語る物語でなければ存在する意味がない。その意味からも伝承民話が語られないというのは、今がないということでもある。

今、ふるさと風の会には民話ルネサンスと言う縛りはない。暮らしのあらゆる側面において物語の、恋の降る里となるべく見上げてもつぺんの見えない程の高さの杭を何本も立て大いなる声の叫びたいと考えている。

※ また、今から7年前に、小学から高校まで過ごした岐阜県神岡町（飛騨市）から依頼されて書いた記事を、記録として掲載させていただきます。

（木村記）

ふる里とは「物語の降る里」

白井啓治

2014年1月

疎開先であった北海道から神岡町に越して来たのは昭和26年2月。小学校入学から高等学校卒業まで神岡町に過ごした。人間形成にとって一番重大な少年期、思春期を神岡に過ごしたのであった。

栃洞小学校に入学し、その後すぐに下之本に移り、中学2年に神岡中学へ、そして船津高等学校卒業まで神岡に過ごした。中学、高校はスキー馬鹿で過ごしてきた。当時を知る人には、私が脚本・演出家になるなどとは思ってもいなかったと思う。

しかし、飛騨神岡という地は少年期、思春期の私の裡に無数の牧歌的物語の種を蒔いてくれた。作家生活に入る前までは、私の裡に物語の種が蒔かれて在った事に気付かなかったのであるが、どんな作品を書く時にも最初の双葉は雪深い山裾に芽吹いたものであったといえる。

これは個人的内面感覚の問題ではあるのだが、物語・作品が生れるためには、その出生地が必要であり、それが曖昧であったり、不明確である場合は物語が発芽しても歪な草木（物語）にしか育たないものである。現在、私は茨城県石岡市に住み、この地の風景・伝説などをモチーフに「常世の国（常陸国・茨城県）の恋物語百」を手話舞の女優小林幸枝のために書いているのであるが、物語の芽の顔を出した種子の原産、出生地の殆どが飛騨神岡である。

昨年10月23日から25日、東京両国のシアターX（カイ）で、日本のパントマイムの草分けであるヨネヤマママコ女史の共演を得て、イギリスの作曲家ホルストが伊藤道朗のために作った「日本組曲」を主題として、霞ヶ浦に伝わる平将門伝説をモチーフにして書いた朗読舞劇『苺萱姫

（さくらひめ）物語』の公演を行った。この事は、この神岡ニュースにも紹介して頂き、神岡出身の人達にもご来場いただいた。

苺萱姫物語の最後のくだりの舞歌の始まりに、この世には情熱の法則があります。

法則にかなわぬ情熱はすぐに冷めて、凍りついて、粉々に砕け散ってしまいます。

あなたの情熱は法則よりも早く、そして熱く走り出してしまったものだから、法則があなたに追いついて行くことが出来なかつたのです。

と書いたのであったが、この恋歌の双葉は、船津高校の時の初恋の感情が風景としての種となり、私の裡に仕舞いこまれて在ったものである。人生にはいろいろな時と側面での体験を積み上げていくのであるが、それらが全て物語の種となり得るとは限らない。むしろ種となり得ないことの方が多い。

私にとっての飛騨神岡での生活体験の多くは、風景としての物語の種となつて裡に仕舞いこまれて在る。私が脚本家への因縁まいたのを見るならば、スキー馬鹿真盛りの高校2年の時に、今はもうないそうであるが、山雅書房で偶然目にしたランボーの詩集「酔いどれ舟」の文庫本を買い、詩の世界にのめり込んでいった事も一つ上げることが出来る。

いま茨城の片田舎で、知人たちにふる里とはなんですか、と問われるとき、必ずこう答えている。

「ふる里とは、恋の降る里であり物語の降る里」のことだと。恋も物語も結末はどうあれ希望を語るものなのだから、この地をふる里と思うのであれば、恋も物語も沢山降らせなければね、と話している。

久しく・・・、そう、もう20年以上神岡へは行っていないが、私にとつて神岡はまさにふる里、物語の心に降る里である。

(ランボオの詩「ロマン」より…)

十七歳の年ごろには堅気ではられない。

：

六月の夜。

十七歳。

—陶酔せずにはいられません。

血の気はいわばシャンパンの泡。

頭に上つてくるのです。

そぞろ歩きをしていると、まるで小さな生き

物みたいにびくびく動く口づけを、この唇に

感じます。

その時の私も十七歳であった。

「あなたへ」

あなた

恋瀬の流れが赤く染まつたら

あなたの涙を流してくれますか

あなた

恋瀬の流れが青く染まつたら

あなたの恋を囁いてくれますか

あなた

恋瀬の流れが黒く染まつた時

あなたは流れ星になって私の願いを叶えてくれま

すか

約束をください

あなたが約束をくれたら

私は月になって恋瀬の葦の景に

あなたをお誘いいたします

あなた

まほろばの里が赤く染まつたら

あなたの涙を流してくれますか

あなた

まほろばの里が青く染まつたら

あなたの恋を囁いてくれますか

あなた

まほろばの里が黒く染まつたら

あなたは流れ星になって私の願いを叶えて

くれますか

約束をください

あなたが約束をくれたら

私は黄金の夷りとなって

あなたの腕の中に眠ります

祝「ふるさと風・180号」市川紀行

ふるさと「風」15年・180号刊行おめでとう
ございます。その熱意とご苦労に心から敬意を表
します。

一ヶ月に一回といえは余裕があるようにも思われ
ますが、実際は慌しいもの、もうすぐに次回がや
つてきます。美浦の縄文陸平貝塚の活動紙「ヨイ
シヨプレス」も同様ですぐに編集会議となります。
熱意と思いがなければできません。毎月15年、
180回、よくぞ頑張つてこられました。いま手
元に故郷「風」142号があります。18年3月
号です。白井啓治主宰の巻頭言、菅原茂美医師の
人類学的科学エッセイ、木村進氏の「歴史発掘」、
打田昇三先生の長編「平家物語」最終場面が、労

音・文化活動木下明男氏の重厚な論文が紙面を占
めておられる。全国的にも地方文化のあり方とし
て稀有な存在でありました。女性陣も地域の彩を
そえ、美浦の田島早苗女史の自伝もしつかりとの
せてくださっている。そして白井氏の便りにはこ
う書き添えてありました。「二か月後144号、区
切りの12周年です。特別寄稿願います。とりあ
えず全員欠けることなく15年まで頑張ります」。
私は当時15年が20年でも当たり前と思つて
いました。白井氏本人も「風」の皆さんもそうだ
つたと思います。しかししばらく後思いもかけず
白井氏が急逝、追いかけるように菅原氏が逝去さ
れる事態になりました。どうなるのだろうかと対
岸の歴史の里の自立文化活動の行方が心配された。
発足時からの長い交流だったし、同じ霞ヶ浦の湖
岸文化を担っている同志でもあったからです。

時は流れて、今2021年5月、「風」は180
号・15周年を見事に迎えられた。木村進氏を中
心核に結束され新メンバーも加わりユニークさ
を増しています。打田氏の長編は「太平記」に移
つています。兼平女史の「顔」は健在であります。

ご苦労も語れぬほどされたはずだが、やはり「故
郷・石岡」を思う熱意が道を開かれたのだと言ひ
たい。さすが「風」の皆さんです。おめでどうの
言葉しかありません。今後200号を目指して
一層のご発展をお祈りしています。お祝いついで
に「風」への夢一つ。「木村さん、白井氏のつくば
恋物語にもう一つ書き加えてください。そして小
林嬢の手話舞をもう一度舞台上に！」

(元美浦村長 陸平をヨイシヨする会)

(次ページの詩は、市川紀行詩集 ANTHOL
OGY (I) (II) 菜の花舎より抜粋)

母に1

市川紀行

母さん ほら
道のむこう
林のむこう
白い空がどこまでも広がる
過ぎた昔を はこび
はてしなく
ほんとうに 母さん
若くて死んだ父さんも
そこにいるようだ

母に2

市川紀行

この母も
妻の母も
私の愛する人の母たちも
南に北に
海の向こうに 砂漠の彼方に
今尚戦いの地に 和みの谷に
時の前に等しくその位置を持つ者だけの
大いなる母たちの姿
その深い笑みの瞳が
人生の命に重ねられ
我が母は妻の母
愛する人の母はまた人々の母
人々の母は宇宙の母

春の丘に立ちて歌う

市川紀行

全て母なるもの
語り得ぬ恵をそそぎ
愛(かな)しく輝き
年老いて行くのだから
又生まれてくるために
春霞 美浦路のほとり
吹き渡るさみどりの風の香り
冬の名残りをとき放ち
流れるよ
季節の息吹き
さわさわと 水のまなざし
過ぎし夏 激しく荒い
過ぎし秋 稔りを奪い
月を埋め 星を埋め
きびしかる時ながれ
いま霞ヶ浦のほとり
吹きわたる渡る風の香りに
ゆたかにも広がる大地
ああ湖のほとり
縄文びとのふるさとに
水よ いにしえのたつきを語れ
防人びとのふるさとに
水よ いにしえのいくさを語れ
いま 山のさやかな姿のままに
ひとのいのちと咲く花を語れ

暁の鐘

市川紀行

ああ湖のほとり
小鳥らの軽やかな声に
芽生えの森の光をゆらせ
春の丘に陽は移り
ひと日暮れなずむ雲よ雲よ
はるかなはての
つらなるはての
すべて希みと夢の色して
たどりゆく白きもの
霞の里よ 旅人よ
明けの鐘をかすかに突いた
まだ遠い朝の光
街々もまだ眠りの中にあつた
一つの星もまだ光っていた
明けの鐘をかすかに突いた
まだ遠い朝の光
僕はまどろみもせず見つめていた
暗い夕日の溺れたところ
その時 僕は知っていた
汚れのないこの世の美しさを
泣きもしない恍惚と共に
金色の雲の峰は懐かしかった
つま先立った太陽でさえ
僕の瞳に映っていた

祝「ふるさと風」15周年(180号)

おめでどういいます！ 木下明男

私が「ふるさと風」に関わるようになったのは、ことば座公演の会場としてギター館をみたいと、白井氏より頼まれたことです。2006年10月頃でしたか？その翌年(2007年)2月に、ことば座の旗揚げ公演として、ギター館で開催されたのが始まりです。ギター文化館発「常世の国の恋物語百」として、定期公演を年間6回開催したいと言い、白井氏はこう話してくれた。「石岡に越してきて10年、前半の5年はただ寝に帰る場所だった。後半の5年は、ここを終の地にする覚悟を決めるに費やした時間。そして10年を迎えた年に漸くこの石岡に終の暮らしをし、紡ぐ覚悟と目標を見つけることが出来た。それが「常世の国の恋物語百」の創作と発表。このキツカケを与えてくれたのが、俳優を志望してやって来た聾者の小林幸枝です。旧八郷町の風景を「まほろばの里」と表現する人もいるがその通りだと思う。愛すべき風景の中に建つギター文化館を発信拠点として、小林幸枝と常世の国の風景の中、百の恋物語に旅しようと思う。旅の始まりは「恋瀬の川の恋物語」から、百の恋物語の終着点はまだ見えていない。百の恋物語を語り舞うのに何年かかるかも見えてないが、途中道に迷って行き暮れて、死暮れぬことを念じている。心温かい応援を頂ければと思っています。」

白井氏は、私からすぐに返事を貰えると思っていなかったらしく、良いですよとの返答にえら

く喜んでくれた。そして、地方行政の文化に対する考え方の低さについて語り、意気投合したものです。その後、「ふるさと風」に原稿を頼まれたのは、2009年3月号(34号)です。それ以降、度々寄稿するようになり、数年続いた。それから暫くして、発行100号記念に祝文を依頼された。数年前にギター館を退職して、暇になったのを見透かされ、メンバーに誘われ参加を決めた。白井氏との付き合いが深まるにつれ、彼から多くのことを学ぶ、シャイでオシャレで美食家、その上スポーツマンだった。一向に上達しなかったが、ゴルフも教えて貰い、彼の人脉も紹介された。そして、彼には、「常世の国の恋物語百」は、まだ三十の半ば、約束は百話までだからねと言っていたものです。

月一回の定例会での自由な会話は、世相から始まり多岐にわたり楽しいものです。9人のメンバーが喧々諤々、其々の人生経験があり、学ぶことが多々ありました。残念ながら、二人のメンバーが鬼籍に入り、現在は7人で今後について話しています。実態は、メンバーが高齢化しているので、若いメンバーの参加、協力者と寄稿者を増やす等々課題がいっぱいです。そして、ことば座による朗読舞の復活や「ふるさと風文庫展」と「ことば絵同好会展」の開催も大きな課題です。2000号に向けて頑張りたいが・・・!

我が労音史(29)

木下明男

20代に参加した労音運動は、1970年からは労音の中心活動家として参加しています。そして、

労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の中から学んだ内容を記述していきます。

2000年の社会情勢と音楽状況

ロシア大統領選挙でプーチン選出される。平城で分断後55年ぶりに南北朝鮮首脳会談が開催された。バレンツ海(北極海)でロシア原潜が沈没し118人が犠牲になる。米大統領選挙で法廷闘争があり、大混乱の中ブッシュが当選した。パリ郊外で仏のコンコルド機が墜落、113人が死亡した。

森首相による、自民・公明・保守の3党連立政権が発足。主要8ヶ国首脳会議(沖縄サミット)が開催される。尼崎大気汚染公害訴訟で国などの賠償を認める判決が出される。北海道有珠山の噴火に続き、三宅島でも噴火が続き全島民避難が決まる。シドニー五輪で高橋尚子(マラソン)等に金メダル獲得。雪印乳業の牛乳による食中毒事件で1400人を超える患者が発生する。さこう・千代田生命等が民事再生法に申請する。(ダブル破綻) 日本オペラ界に貢献した、M・グルリットのオペラ「ヴォツェク」が、読響で初演(アルブレヒト指揮)され話題となる。バツハ生誕250年で記念演奏会が各地で開催される。1980年代クラシック演奏会が85.5%開催、その内海外演奏家の比率は26%。(音楽の友社) 白川英樹教授がノーベル化学賞を受賞(導電性高分子の発見と発展) この年逝去された著名な音楽家・文化人・高田三郎(作曲家)中田喜直(作曲家)宮沢純一(音楽評論)三枝喜美子(アルト歌手)佐川吉男(音楽評論)青江三奈(歌手)ミヤコ蝶々(漫才)小倉遊亀(画家)滝沢修(俳優)

2000年の労音の動き

第48回総会は、最近10年の中で一番の組織数を作ったが厳しい財政状況は克服できていないと分析。そこで健全財政を守るために、ブロックごとの固定会員拡大を柱に捉え、運営面・企画面での方針を確認した。東京労音は3年後に創立50年を迎える。一部の者だけの楽しみであった【音楽】を、安く多くの人たちが聴ける機会を作るため、演奏家・専門家の協力を得て鑑賞運動としてスタートした。そして、演奏家も聴衆も、日本の音楽界に大きく貢献し、世界でも稀な鑑賞運動を確立した。しかし、社会状況や音楽状況の変化に対応できずにいる。また、組織基盤も変化から財政面での赤字が続いている。

この閉塞状況から脱却するため、組織・企画・運営での改革が必要になっている。今年度は、204例会138,279人をコンサートに参加させた。昨年比15ステージ19,679人増で大きく増えた。しかし、運営機関と事務局は、204の公演を維持するために精一杯で、丁寧な運営取り組みが出来ず、悪循環が続いている。事務局の規模を最小限に絞り、力量に見合った企画立案をする等の、抜本的見直しが求められる。併せて運営委員会・事務局体制の強化をしていくことが決議された。

固定会員を増やす目標 3100名に対し、1500名に終わる。Aコース会員(全体から選択)が目標から9名増の109名を達成。Cコース会員(ゆうぼうと)は、目標達成はならなかったが、36名増で初めて300名を超す成果を上げた。東葛地域が80人増で大きく前進した。他のコースは現状維持に終わる。安定した例会運営のための柱として「固定会員」増の活動目標は大きな成果を上げられな

かった。

企画面では、新人や中堅の演奏家に光を当てる「Do One's Best リサイタルシリーズ」は、松岡みやび(ハープ)と神谷未穂(ヴァイオリン)の公演を行う。松岡みやびはCDデビューもあり、パツハ・シヨパン・ドボルザークから黛敏郎編曲の六段まで、意欲的なプログラムで、ハープの可能性表現した。神谷未穂は、留学先のドイツから帰国してコンサートに臨んだ。新人ながらダイナミック且つ繊細な表現、プログラムもハードでありながら、なんの危うさも感じさせず、今後に期待される。東部ブロックと南部ブロックで続けている「音楽の楽しみ」(長谷川武久解説)では、横山和加子(ヴァイオリン) 本間有紀(ピアノ) 平井裕子(ピアノ) 磯絵里子(ヴァイオリン) 荒庸子(チェロ) が取り組まれる。近くの会場で、若手演奏家の熱演は高い評価を得ている。小会場ならではの独創性も加味され、続いている企画が期待される。

合唱の取り組みは、恒例の第九とVOJAを取り組んだ。VOJAは、松戸森のホールと厚生年金会館の2公演を、今回もコーラスを一般募集し、松戸196名新宿300名の若い者が中心の合唱団を組織。「亀淵友香&VOJA」と共に熱気溢れるステージを作る。

「モスクワ音楽劇場バレエ」は、「白鳥の湖」3ステージ「ロミオとジュリエット」2ステージを取り組む。ロミオとジュリエットは、オーケストラも衣装を着けステージ上で演奏、それらを囲むように舞台が二層に作られ、日本初公開の斬新な舞台で、ステージの美しさは高い評価を得た。朝日のスポットやチケットぴあとの協力的体制

をとり、宣伝や各団体への案内等を強化したが、組織は低迷し大きな赤字となった。

マスコミで話題の「フジ子・ヘミング」(ピアノ)を東京文化会館・大宮ソニック・パルテノン多摩で5公演、すべての会場で即日完売。内容も個性的な音色と独特の雰囲気、会場ではスタンディングオベーションが起きる等大好評だった。「吉田兄弟」(津軽三味線)も、アミュー立川・松戸森のホールの2公演取り組み満席で成功した。「グッチ裕三ファミリーコンサート」は、7会場12ステージおこない、親子コンサートして夏休み開催が定着した。「美輪明宏」も3会場で成功、北とぴあではコンサートではない講演会が好評だった。「中沢桂」「倍賞千恵子」「長谷川きよし」等が久しぶりのコンサートを実現。ジャズの「秋吉敏子」8ピアノ)が紀尾井ホールで、トーク&ライブを開催、人間性溢れる素晴らしいステージになる。

伝統芸能の例会は安定してきた。労音から発信されたアーテイスト「国本武春」は、会場を変えながら7回おこない、知名度も広がっている。東葛ブロック恒例の「野村狂言の会」は、松戸・市川・八千代で夫々2回ずつ取り組む。「高橋竹童」は大田区民プラザ・さいたま市文化センター・北とぴあで取り組む。落語例会は、南部と東部で其々3回取組んだ。

各会館センターの状況

● 大久保会館

貸し出し収入が23%増加、要因は利用者との話し合い、使用料の相談に応じたり、企画・制作のアドバイス等の中から利用者との信頼関係が強まった。新しい定期使用者が生まれた。(早川隆章)

ヤズバンド・ミネハハバンドマイムの松元ヒロ・寿・大塚博堂メモリアル等)

●十条会館

貸し出し収入は2・3%下がった。利用者が土・日に集中し平日利用が下がったことが原因。今年度は、アートスタジオコンサートを進める。労音・出演者・構成者が協力し制作した「あかぎてるスペシャル」が2回実現。このスタッフと協力し、スタジオに観客席を作り画期的な取り組みとなった。

●お茶の水センター

貸し出し収入は、センターを事務所としている「劇団新人会」「日本キューバ友好協会」の家賃収入が見込めなくなりそう。印刷部の収入も厳しく危機的な状況になりそう。センターに集まる仲間との協力で、音響・照明等の設備を整え、ライブハウスの雰囲気を実現。今後、ライブハウスとして、定期使用の練習会場として、会員の集まる場として、利用者を増やしていく。

●南部センター

前年に続き太鼓教室の練習会場、地域でのコンサート会場として使用。今後は、落語会(昨年夢助を表現)や恒例となった、納涼会・忘年会・新年会等々、会員相互の交流の場としていく。

●東部センター

「日の出寄席」の回「音楽の楽しみ」3回開催。「音楽の楽しみ」は企画制作の長谷川武久氏自らの音楽活動の拠点となっている。(文団連の機関紙にも、氏のシリーズへの思いや展望が投稿された)民族音楽教室「たみの会」・車人形教室・合唱団「たんぼぼ」などの活動拠点として利用。貸会場として、お花・ちぎり絵・気功・バレエ・声優育成な

どの教室として定期利用されている。センターの存在は地域に広まっているが、昼間利用を増やすことが今後の課題。

●ギター文化館

年間12回のコンサート、土・日には3回のミニコンサートを行ってきた。年間入場は保々昨年並みの300名。定期コンサートでは、「長谷川きよし」「高橋竹童」が好評。ギターの会館としては、和楽器の三味線は珍しいが、同じ撥弦楽器として「春の竹童津軽三味線コンサート」として定着している。財政的にはボランティアによる運営で赤字を維持。間もなく10周年を迎えるギター文化館は、会館運営に関して労音としての胞子を出し時期にきている。

演奏サークル会議を2回開催し、運営委員会との交流を深めた。「東京労音合唱団」は、秋に北とぴあ・さくらホールでの演奏会を成功。北区合唱祭・足立ふれあいコンサートに参加。東部の「ロシア民族アンサンブル」での歓迎演奏、「ペギー葉山」例会での「ペギーと歌おう合唱団」に団員として参加。「第九」合唱団にも14名が参加、他に出前コンサートなど活発に活動を展開、現在44名の団員。「労音・車人形の会」は、新曲「漫才」を4回、組み合わせは各回違い好評。秋から「さんしょう太夫」に取り掛かり、一人二役のトリプルキャスト体制で、誰が休んでも練習できます。やつと一組が形になってきて、民研とのジョイントで、生演奏も計画中です。その他、「アコーディオン研究会」「六弦会」「笛・太鼓教室」「民族音楽教室」が毎週定例で十条会館にて練習。

翌年招聘予定の「アイリッシュダンスとサフアリンゲールズ」公演成功に向けて「夏の交流会・

アイルランドの旅」が企画され、17名が参加。アイルランドでは、クロン・マクノイズ、ドン・エングス遺跡やモハーの断崖などの大自然に圧倒された。イニシュモア島のゴールウェイでアイリッシュダンスを鑑賞し、ダブリンのトラッド・ミュージックセンターで歴史や音楽に触れる。アイリッシュダンスのステップに魅了され、コンサートへの期待が高まる。夏の交流会は昨年、式根島を予定して、目標8名を達成したが、伊豆地震で中止、この年のリベンジに取り組んだ。

第44回全国労音連絡会議は箱根塔ノ沢温泉「観山苑」で、34労音90名が参加して開催。浜松音楽鑑賞協会が解散、東北ブロックが消滅、「合図音楽鑑賞友の会」は関東ブロックに編入。ブロックごとの加盟団体は、北海道7、関東10、東京4、信越4、東海4、関西9、山陽道10、四国4、九州5の57団体。労音運動50周年を迎え、日本の内外に労音運動の存在をアピールしていくことを確認。秋に、上野の東天紅で「全国労音50周年祝賀会」が開催。全国から、27団体132名が参加。アーティスト・音楽事務所・マスコミなどから237名が参加。ペギー葉山、デュークの谷道夫、松浦豊明、樽松三郎、中藤泰雄、関昭三の各氏から挨拶を貰う。大阪予定の祝賀会が急遽変更になり不十分な準備時間だったが、369名の参加で熱気あふれる祝賀会となり、全員で労音50周年を祝った。

※ 労音運動と労音の音楽活動は、まだまだ続いていくのだが、この年限りで労音から離れた。ギター文化館の活動に専念することになり、

これ以降については語れないので、此れで私の歴史は終了します。

【5 菫蒲沢・上曾・小幡地区】(3)

5.4 北向観音堂(小町ゆかり)

辻の交差点を山側に入った奥の左手に「北向観音堂」があります。ここの北向観音堂は平安時代の歌人で絶世の美女と謳われた小野小町が悪い皮膚病に罹り、ここの11面観世音菩薩に病い平癒の祈願をすると共に、霊石のいぼ神様にお祈りをした所立ち所に治ったと伝えられています。



この観音堂への登り階段は美しい。
「映蔵」などの撮影に使われたという。

全国に小町伝説は数多く存在します。この山の反対側の土浦市新治地区では小野姓の家の裏手に小町の墓が残っています。また「小町の里」としてそば打ちなどを行っており公園とな

っています。この北向観音も地元の有志(八郷町ふるさとの史跡まもり隊)の手で数年前に綺麗に整備されました。小川のせせらぎや鶯のなぐのどかなまわりの雰囲気はとても好きなおところ。この地名には「仏生寺」と言われており、この堂も聖武天皇(奈良時代)の御代、行基菩薩によって創建されたと伝えられています。ここは筑波山の不動峠への上り口です。昔は盆の17日夜の万灯が賑やかで、月に浮かれて、念仏踊りや盆踊りが盛んであったことである。

山を5分程登ったところにある。途中は少し息切れするくらいの登りである。(恋の道とネーミングしている)
その他、小野小町姿見の池、小町姿硯石、いぼ神様(石)などがある。この観音像は、行基菩薩が奈良から連れて来た稽主勲兄弟の作といわれるが、一説には、観音を背負った回國六部がここにきて病にかかったとき、長い間厄介になったある家の主人に観音のご利益を説き、

お礼として残したのもいう。(八郷町誌)そして毎年、桜が咲いたというところの八郷の筑波山の麓にある小町伝説の残る「北向観音」周辺の里山の桜を見なくなる。あ、今年も会えなね。ありがたい。そんな気がする。

学習会“ごみ処理場・見学”を通して

伊東弓子

令和二年度の学集会は出来ず仕舞いだった。玉里御留川活動を地域の中で、今後どう取り組むか、話し合いの中から模索していこうと考えていたが、コロナの状況の中では一箇所に多勢集うことは無理と諦め断念した経過があった。又ごみ処理場のことは、御留川の活動と平行して進めてきたので石岡の勉強会の人の誘いを快く受け、取り組むことにした。

白雲荘を利用して仲間から、新しいごみ処理場が出来ると聞いたのは、六、七年前になる。場所・請け負う会社等、決っていて予定地から三百メートル以内の家には声をかけ、説明会が済んでいた。先進地の見学もしたという話だった。東西南北三百メートル以内には百軒位の家がある。こんな大仕事・将来に借金を背負うであろう。三市一町の二十万もの人にはどう伝わっているのだろう、と不安が募ってきた。市に問い合わせると「広報誌に載せてあります」との返事が何故か冷たく感じられた。玉里地区で説明会をもってもらったり、地区の説明会、石岡の人達の勉強会へと、声かけして参加したが大きな計画は、私達の小さな心配など相手にしていないようだ。市の議会でも何度も話題になったが決定されている事に、要望を出していく程度のようにしか思えなかった。おまけに担当の人の説明が反感を買うような事が多かった。ある議員さんが、「職員さんは専門的なこと知っているでしょうが、住民の人達は不安なこと、心配ごとを聞いている

のだから、もう一寸柔らかい口調で丁寧な説明をしてあげてくださいよ」と、言ってくれた。又、「玉里地区が三市一町のごみ捨て場にならないように、市長・町長さんにはよろしくお願いしたいが、特に小美玉の市長さんお願いしますよ……」は心強く感じられたが、果たして市・町長さんなどの位力を發揮してくれるか信じがたいものだ。それから間もなく担当の職員さんが変わっていた。ごみ処理場とのかかわりはこういう状況の中から始まったと、出来上がった施設や周囲を眺めながら思い起していた。

十五分遅れたことは、主催してくれた石岡の人達には申し訳なく思った。石岡の人達三十人、私達の呼びかけで十三人という人数、広い集会室で説明を聞いた。

説明や施設内を案内してくれたのは、この施設を請け負った側の人達で、地元まつわる事は説明してもらえなかった。石岡の人達は質問状なども出しておいたとのことだが、事務所とのつながりはないのであるか。まだまだ新しい施設が出来たことを喜ぶだけではすまない。今後の課題は多いようだ。ごみ処理場完成と共に、周囲が大きく変わったのに驚く。五万掘と名の残る八幡太郎義家の通った姿はない。南側から西にかけて立派な道路が出来たのだ。旭・服部勤王志士遭難之碑もお粗末な場所に動いた。北側にある大きかった筈の大池は小さく整えられている。東側から北側にかけての山林(田中)は全部太陽光発電の設備で埋めつくされ、東奥の山林(高崎)は高圧線鉄塔が建ち一部ひどい形で森の姿を残している。

大会議室の説明のあと、手選別室・中央操作室・プラットホーム・ごみピット・ごみクレーン操作

スペース中央制御室・炉室・蒸気タービン発電機・多目的ホールと回った。大型機械が多いのに驚き、操作する人の少ないのに又々驚いた。

雲行きが悪くなった中で、慌しく解散したがその後、同級生同志で、御留川の会議の中で感想を語り合ったり、年寄りといえども生きていく中で、今後のごみに対する考え方、扱い方を話し合った。石岡の人達の学集し続ける姿勢、活動し続けている姿は大いに見習いたい。

私が「ごみ」を意識したのは二十才の頃だった。それまでは全部土に戻っていた。燃やせるものは燃やして灰となり肥しとなった。金物は時々小川町から来るがね屋さんに、壊れた瀬戸物、瓶は三角山に捨てた。二十才の時、読売新聞に「日本の富士の山、世界に誇る富士山がごみの山」という記事を見て驚き、出かけて行った。あき缶、あき瓶、その他さまざま酷い汚れだった。一泊して帰り清して仕事をしていると、読売新聞の茨城版に「子供の夢を壊したくないと、茨城からごみ拾いに参加」と、御殿場市長さんと握手している写真が載っていてちよっとしたニュース沙汰になった。そつと参加した積りだったが……その後も青年会の研修に行く途中で「ごみ拾いをする仕事がなくなるから」という言葉に驚き、鹿島公民館の“前よりも美しく”の言葉に感動し、新婚旅行先での便所掃除のことで笑い話になり、常盤線の列車内で酔った人と言ひ合いになったり、様々なことがあった。電車に変わってからも車内は、若い女子高校生まで汚していた。あの親父達だつて酒飲みながら散らかしんだろう”の反発の声にもめげず“言ってもどうしようもない人には仕様が無い”の。若いみんなにはああなつてほしくないか

らね”と、そんなやりとりもあった。霞ヶ浦の汚れを何とかしようという集いの中で小学生の女の子の話しを聞いた。外食した時のペーパーを持ち帰り、濯いで干し自分の食事の茶碗・皿の特に油汚れを拭き取ることをしているとのこと。小さな行動が、心掛けが感動として伝わった私は、その時以来その子と同じことを実行している。あの子は今もう母親になって自分の子にきつと“小さな行動・心掛”を伝えていくことだろう。社宅に住んでいた頃、ごみ回収場に入れてもらえず苦労したこともあった。

現在までつづけてきたことは反発からだ。車で行き来している人は気にならないだろうが、歩きや自転車の生活では目につく。目につかなければいいが、目についてしまう。そして腹が立つ。いづみと散歩で木の枝を折ってさして歩く。篠笹の棒にさして歩く。月に二回しみじみの会の人達とごみ拾いをしているが、人の目の無い所、少ない所はごみを投げていく。堤防も工事中の箇所には又その近辺にはごみは全くなかった。工事も終わって一ヶ月、そろそろ増えてくるかもしれない。山王川の出口には布団が丁寧に縛って投げられている。何としよう。考えている途中だ。小井戸と玉里境の山、田中と玉里境の山道にひどい。文化センターコスモスへ新しい道、古い市海道の名を残す山道を拡大して出来たが、その谷側にゴルフの道具、衣類など六く七個、子供か孫さんが勉強したであろう机・椅子の無残な姿が投げ捨てられてあった。上に持ち上げるだけでも二時間かかかかった。私がやったと自慢している訳ではありません。どうしたらいいのでしょうか。見ぬふり出来ぬ苦しさが余計に私を苦しめているのです。

家庭内での努力も怠らない。少しでも減らす。よく分ける。腐る物は腐らす。買う時も袋利用。ダンボールを貰う。ビニール袋は貰わない。又、地区のコミュニティに出す物、知り合いの業者に渡す物、市のごみ置場において頼む物と丁寧に行っている。

便利すぎる方法で簡単に手に入り、数多い品物、どこかで歯止めがかからないと、人間の驕りは増長するばかりだ。

- 1、父、母、祖父、祖母は子供に家庭で確り身につけよう。
 - 2、学校、園、施設、各店でも確り取り組んではほしい。
 - 3、自動車学校でも、免許を取る人、更新する人に確り教育してほしい。
 - 4、農業、山林事業者も美しい耕作地、栽培地で美味しい物を作ってほしい
 - 5、役所も掃除の人にお任せでなく、全体を見回す機会、又市内の各所を市長さん始め、お偉方も見て歩くこと、実行してみてください。
 - 6、御留川では最後に、鉾田・潮来の国交省にお願いに上ったり、釣人への声かけを行う予定です。
- ごみ処理場は、高いお金を出して何故作ったのか考えてみましょう。地区ごとに、常会で見学をして見ましよう。
- 先ず“あなたが缶一個拾うことで感じましよう”



大久保の風穴

小林幸枝

ふるさと風会報15周年おめでとうございませう。

ネットで気になる場所を見つけました。見に行きたくなりしましたが、コロナが収束したら友達と出かけて見たいと思います。

それは、日立市にある「大久保の風穴」と呼ばれるところです。風穴は富士山の麓などにもあり、火山の溶岩などによる穴に出来たりするようすが、いろいろな地層や崖の崩落などでもできるようです。その風穴が茨城県にもあったのです。

場所は、日立市末広町5丁目の大久保中学校または、中丸団地入り口信号を北へ少し入り、桜川の谷に浴った道を1kmほど登ったところにあります。

谷沿いの道は、杉木立が多く、「大久保の風穴」案内看板も、まったく気にかけていなければ気がつかないレベルの看板だそうです。周りには草が生い茂っていて、風穴までは、道から歩いて行くようですが、草が生い茂っていると道もよくわからないレベルだそうです。

ネットの説明によると、風穴付近の地形は急峻なV字型の谷で、この谷は、桜川が石灰岩地域を侵食したあとにできたものだそうです。また、風穴には、上下に2つの洞穴があって、その上の洞穴が大きくて普通に見学できるようです。(ただし、装備がないと危険なようですので、出かけるときにはよく確認した方が良いでしょう。)

下の洞穴は地下水が湧出していて、穴の高さが1・5m、幅が0・5mで、ただ奥行きは1・5mほどですぐに狭くなっていて中に人は入れず、

上の洞穴は人が入れる大きさがあるようですが、結構厳しそうです。上の洞穴は、下の洞穴から、さらに35m程登り、岸壁につけられた鎖を3mほど伝って入口にたどり着くことが出来ます。入り口からは風が少し吹き上がってくるのがわかります。また夏場などはかなり涼しい風と感じると思います。

この上の洞穴の入口は、高さが3m、幅2mありますので、人が十分洞穴内に入る事ができますが、洞穴内には明かりがありませんので、懐中電灯は必携です。説明によれば、ライトを頼りに途中体をくねらせたり、急な絶壁を鉄ばしごで登ったりしながら約30m奥の「8畳の間」と名前が付いた約所まで行けるそうです。先は堅穴になってるので滑り落ちないように危険防止の鉄柵があるといひます。ただ、風穴内は危険なため、進入禁止などという情報もありましたので確認が必要です。この風穴について次のような伝説があります。

「この風穴は天神が造ったもので、人間がこの穴に入ろうとすると必ずこの洞穴から風が吹いてくる。」

また洞穴内に石塔などがあって信者の霊場になっていたようです。

所在地：日立市大久保



会員の一人である木村進氏の、日ごろからのひとかたならぬ尽力により、この「風の会」会報の縮刷版がすでに7冊も出来上がっていて、大急ぎで過去の4年分を読みました。

この会に参加してから3年余りが過ぎましたが、おおよそこの私が考えられる、ことがらについて、相当な時間と労力を費やして書き綴ってきました。(それは日々の営為によつて、形作られたりするものですけれど、私が、連載の中で言っているようなことは、既に先輩諸氏によつて語られてしまつていて、屋下に屋を架する、の感が否めなくもありません。)

時折り知人から問われたりするのですが、宇宙の果ての有無や、学問の優位性・有為性など、根源的な事象についての回答は、逆にむしろこちらから問いかけたいほです。

また、
「わざわざ言わなくてもいいことを書いて、新たに敵を作り、お前自身にはちつともいいことがないのに何で書いたりするのか？」

という忠告に対しては、ここでいま発言しておかなければ、将来後悔するだろうからだ、としか答えられません。

「毎月飽きもせず、よくもまあつきからつきにつまらないことを書いているもんだなあ。」

というご意見には、
「まったく、おっしゃる通りです。」

と答えるしかありません。

ひとは誰しも、時にはふと立ち止まつて、物思いにふけつたりするものです。日常のちよつとした瞬間に、

「自分は、なんでこんなことをしているんだろうかな？」

などと自問自答したりもするでしょう。

それは、小さな芋虫が、木の葉を食べながら、そのアタマを持ち上げて、しばらくじつとしている姿に似ているようです。

勿論、虫がこうした哲学的な命題を考えるはずはあるわけもないのですが、私にしてみたら、その姿は自分の姿の投影でもあるかのように見えてしまつたりするのです。

ひよつとすると、彼らのアタマのなかには、「高等動物」と言われる人間などの思いも及ばない、異次元の思考形態が存在するのもかも知れない、などと夢想したりもします。

穏やかな春の一日。やわらかな陽光に包まれながら、ふとこんなことを考えていました。

幾度もめぐりくる春の日の昼下がり、柄にもなく「詩人」になつたりもするというわけです。下手くそな俳句や短歌をひねってみたり、あらぬ事を夢想したり。過去の様々な思い出をしきりに反芻してみたり。

先日外出した折に、空高くヒバリのさえずりを耳にしました。藪鶯の鳴き声も耳にして、春のおとずれを実感しました。

私の頭の中には、いくつもの物語の構想が渦巻いてます。そのうちの三つ四つはもうプリントアウトして、半ば製本までできていて、表紙を付け

ればいいばかりになっています。いまのところ、これらの本を公にするつもりはありません。自分だけの、本当の意味の「私家版」として自室の本棚を飾っています。考えてみれば、なんとも贅沢な楽しみだと言えます。

〈参政権〉

公職選挙法が改正されて、18歳から選挙権があるようになりました。

この際、ついでに参政権の年齢も大幅に引き下げて、18歳からにしてはどうだろうか。若くても優秀な人間はたくさんいます。一方で60, 70過ぎてても呆れるような「老害政治」を行っている者がこの国にはしこたまいるようです。

「素粒子論」も解らないような人間が、文部科学大臣でよいのだろうか？パソコン一つ満足に叩けないような者が、果して自治体の首長にふさわしいのだろうか？

未来の18歳の市長の誕生なんて、わくわくすることじゃないでしょうか。

このことの実現のために必要だ、というのなら「憲法改正」にも、もろ手を挙げて大いに賛成します。

〈ミャンマー〉

世界に目を転じてみれば、ミャンマー(旧ビルマ)では、クーデターによつて政権を掌握したミャンマー国軍による虐殺が続いていて、すでに700人以上が殺されてしまつてその数は日増しに多くなつています。

軍事クーデターに反対する民衆が、各地で自然

発生的な集会を開き、そこへ、危機感を抱いた国軍や警官が襲いかかって、無差別な銃撃・殺戮が行われていきます。

高性能の小銃弾は、若者が手作りした、発泡スチロール入りの防弾チョッキなどあっさり貫いてしまう。警察車両からは、高圧の催涙性の水が浴びせられる。欧米メディアが伝える現地の様子は、悲惨の一語につきます。

これに対して、西側諸国はさつそく12ヶ国の連名で非難声明を出し、一部では、ミャンマーに対する経済制裁がすでに発動されている。またロシアに対しては、ミャンマー国軍に対する武器輸出に対して非難の声も上がっている。

人道的見地から、ミャンマー国軍の民衆に対する武力弾圧政策は非難に値するけれども、非難している国々にしても、後進国に大量の武器を輸出して荒稼ぎをおきながら、いまさら何をかいわんやというところですよ。

また経済制裁をしても、軍事政権にはちつとも痛手とはならず、物価の高騰・食糧不足を招くだけで、いたずらに民衆を経済的に苦しめるだけではない。

こうしたときに、ビルマには、昔から浅からぬ因縁のある日本政府であるのに、ただただ、日を見をして傍観するのみの情けない存在でしかないようです。

〈あと出しじゃんけん〉

日ごろ本などを讀んだりしていると、よく目にするのが、それまで考えてもいなかったのに、人から問われると、ずっと以前からさもよく知って

いたかのように話す者がいます。

(かくいう私もその一人かも知れませんが。)

テレビのコメンテーターと言われてる者の中には、こうした俄か知識人が掃いて捨てるほどいます。あまりに多すぎてここにいちいち名前を挙げきれないほどです。

本人たちは、

「本当を言うと、この問題に関しては以前からひそかに考えていてずっと憂慮していました。」

などとぬけぬけといえます。

こうしたお偉い大先生方は、素人を前にして、

「知りませんでした。」

などとは口が裂けても言えないのです。言ったら最後、其れまでの権威がガラガラと音を立てて崩れ、たちまち、おまんまの食い上げになってしまふからです。

他の人が以前語ったことを、さも自分の新しい知見でもあるかのように話す。更に困ったことに、こうした人物をマスメディアがせっせと持ち上げるものだから、素直な視聴者たちはすっかり騙されてしまいます。政治家や有名実業家の中にもこうした人物がいます。

あえて誰とは申し上げませんが、賢明な読者の皆さんはきつと、

「ははあ、あの人物のことだな。」

と、お気付きになられるはずですよ。

〈記者会見〉

朝のニュースで、長崎県の保健・衛生関係者の記者会見を報道していた。

三月中旬に新型コロナワクチンの接種を受けた

医療関係者の女性が、脳内出血で死亡したという。因果関係はこれから調査するという。一カ月もたつてからの発表に、違和感を感じる。

更に「なんだよ、これから調査なの？なにをのんきなことをいつているんだ。一体今まで何やっていたのか」

という疑問がわいてくる。医療関係者の接種拒絶が多いとも聞く。ワクチンの深刻な副反応に対して、正確な発表をしていないんじゃないかという疑念が常に付きまといつて仕方がない。

〈原発の汚染水を海洋放出〉

新型コロナ対策もまともにできないのに、何を考えているのかね。茨城の海産物、農産物がいわれなき風評被害にあつてること解らないのかな。

また今回もわるぐちのオンパレードになってしまったようです。

深く反省するところでありませう。



思い 出 (十五周年記念)

兼平智恵子

節目節目を大切になさっていたふるさと風の会の故白井代表が待ち望んでいた、当会報十五周年記念。ご愛読頂いております皆様のお陰様で今年で十五周年記念号を発行することが出来ました。心より感謝申し上げます。白井代表そして後を追うようにして逝ってしまった獣医の菅原さん、喜びを共に出来ずどんなにか無念だったことでしょう。



平成二十一年 風のことば絵 同好会 (絵筆 紙教室) での 若き日の 代表。

二人黄泉の国で喜びの談議をしていることでしょう。



白井先生! 菅原さん! 天に向かって叫べど叫べど声返らず。

白井先生は、お母様が山口青邨に師事し俳句をやっていたことから、真似事に五七五を並べていたが、生来のはみ出しの性格、気に入らず、止め

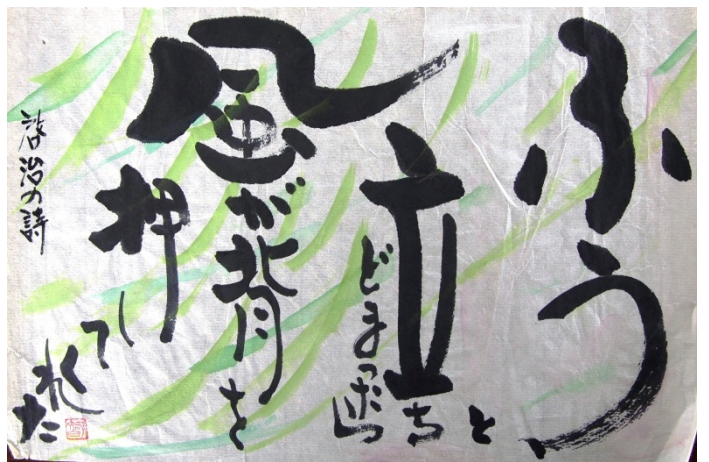
ていたが、神田の古本屋で偶然、種田山頭火の草木塔に出会い、形にとられず一切の無駄を省いて心に残ったことを言葉に落とす句に、芭蕉をこえた俳句だと感動したそうです。そこで先生は全くの形式にこだわらず心に残った事を、一言の眩きとして言葉に書く、言葉に落とす、と言う一言詩を一行文と名づけました。

日々の暮らしの中に小さいけれど心を喜ばせてくれた出来事、発見を自由律に一行の文に紡ぎ、色に染めて、自分を褒める、時には思う人に褒めた自分を葉書に刷ってお裾分けしなさいとご指導を受け、白井先生が名づけてくれた「風のことば絵同好会」を開くことができました。現在八人で楽しんでいきます。

また先生から、「私がよんだ一行文に絵をつけて見るように」と難問が飛んできました。



当時先生は近藤治平のペンネームがありました。よく愛犬とともに市内、出し山地区辺りをこのんで散歩なさっていたようです。



出し山
を
ぬけると
筑波山
と
田園

県フラワーパークから北へ向かい、上曽交差点を左折、道路巾の広いところで峰寺を仰ぎ見る。



小美玉市倉敷地区に鎮座する潮宮神社の参道は人が歩く部分は踏まれ低くなり、両脇の古木の木々の根は露出していた。伝承では正暦三年（九九二）に鹿島神宮の潮宮を遷祀した事に始まると言う。十年位前に風の会皆と参拝しました。



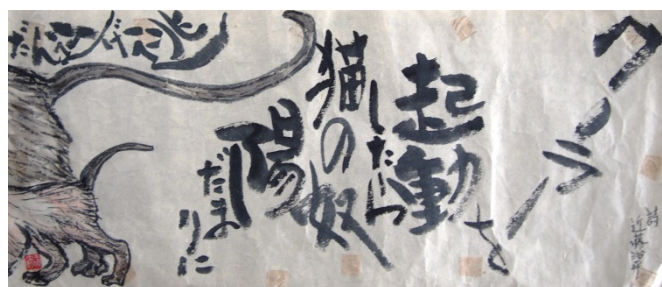
石岡駅東口



石岡駅ベイトン広場



白井代表は動物を愛し、特に犬、猫を大切にされていた。犬友三人でそれぞれに自慢しい、誘い合つての散策を楽しんでおられた。三人の中の前川幸三様より表紙の絵をお寄せ頂きました。先生の犬猫自慢が聞えてきそうです有難うございました。



どうぞ、白井代表お勧めの「今日の嬉しかった事、楽しかった事の幸せを拾って言葉に落とす」一行文に挑戦なされ、寄稿をお待ちしております。

○ 花盛り 萌え盛り 古い盛り 智恵子

毎月違ったテーマにて書かせて頂きます。

今月のテーマは、「困」

知らず知らずの内に、必ずどこかの困の中で生活しています。

それは、地球の一員であったり、何処かの国に属して、都道府県に市に街に、会社に学校に家に、或いは自分自身に。

形ある物だけで無く、精神的な困も多く存在します。

ただ不思議な事に、それを理解できている時とそうでない時があるのです。

意識しなければ、困は無意識的に何かに・何処かに属してしまっている、

囚われてしまっている場合もあるでしょう。

形あるものに与しようとするれば、それはある程度自ずからが率先して、その中に入ろうとしている状態かもしれません。又は、権力争いや意識的な繋がりを強制され、望まぬ状況にいるやもしれません。

本来自身があるべき場所やあるべき姿とはかけ離れてしまう事もあるでしょう。

様々な困の中で、それぞれががき苦しみ、或いは安らぎ幸福を味わい。

見識を正しく深めさえすれば、囚われる事なく自身の望む本来の自分である事が出来ると考えています。

見識を正しく深めるとは、ではどの様にすれば良いのか。

それは勿論、理を知るのです。

それは勿論、容易ではありません。

誰もが出来ているのなら、誰もがそれを目指しているのなら、この世の中は今とは全く違っているはずですから。

ですが、とても重要かつ、望んでか望まぬか、意識してか無意識か、必ずこの世界においては誰かが実際にそれを行っているのです。私自身も意識してそれらを知ろうと努力しています。ゴールは同じでも、その過程は人それぞれ様々でしょう。神仏においてその道を辿る者もいれば、法律・専門学等から進む者もいるでしょう。

未知を極めると言った観点から言えば、職人・格闘家・アスリート等もそれぞれの理を求めて、日々研鑽しているはずで。

そして、先ずは疑問を持つ事が重要です。

生まれて間もない子供達が、出来事・物事について、『何で?』と繰り返し聞いて来たはずで。その時から、無意識的に理を知ろうと始まっていたのです。

一つの例としてあげるのなら、無知な親や努力をしない親から成長した子は、幼き時点で理を探す妨げとなり、その子の望む道を早くから閉ざしているでしょう。とても残念でなりません。

ですから最低限の素養・教養は必要となります。何が言いたいのかと言うと、勿論それぞれが理解できるスピードは様々ですから、よく耳にする所では、高校だけは出ておきなさい、大学という学歴は必要だと、どれも理に叶っています。

そこまで学ぶ場があっても、努力しない事には意味はありませんが、

とはいえ、望まれる事は何かと言えば、学舎において学ぶべき事は、学問ではありません。

当然、必要とされる物は勿論ありますが、集団生活におけるコミュニケーションの築き方や、人との繋がりの重要性、気遣いの仕方やゆずり合い歩み寄り、その他諸々における気付きが必ず必要となります。これは、誰かに教えられる事もありますが、何よりも経験を通して自身で乗り越えて行かなければ、本当の自分の糧とはなりにくいのです。

チャンス逃さず、より良い自身の発展の為にも、その様な努力はして貰いたいものです。

様々な場所に転がり、道を指し示しているそれを見つけさえすれば良いのです。

一つ一つに存在します。

様々な困の中で、今いる場所が本当に自身の為の場所なのか、疑問を持って、何より変化は恐ろしいものではない事を理解して、そこから抜け出す

勇気も必要かもしれません。

新しきを築くのに、早い遅いはありません。ただ動く、という単純かつ難しい、それさえクリア出来れば、昨日より今日はずっと良いはず。未来ある子供達の為にも、毎日少しずつ無理なく、やってみよう。それでは、また次回に。

15周年記念号に寄せて

菊地孝夫

毎号この会報に、思いつくままの文章を、一度も欠かさず、書き続けてきました。そして毎月行っている例会では、好きなことを話させて貰っています。

私がこの「ふるさと風の会」に加わってから、早くも三年を超える年月が過ぎました。この会の例会や会報の印刷・さまざまイベントにも、止むをえない場合を除いて、ほぼすべてにわたって参加し続けてきました。

新たな人々との出会い、新たな経験、そして、その過程では、今までのことになかった考えを持つに至りました。また、今まで素通りしてきた分野の書籍なども読むようになりました。

自分の書いた原稿が活字になり、更にそれを本にするという楽しみも増えました。

自分の精神的成長とは、ちよつと違うようでもあり、なんといえはよいのでしょうかね。

このあたりは、文章によってでは表現できないものようです。

この「ふるさと風の会」の創立者である、亡くなられた白井啓治代表からは、例会のたびに、或いは原稿を持参するたびに、毎回のようにお小言を頂戴しました。「何を書いてもいい」という入会の時の約束。それを口実にして好き勝手なことを書いて来ました。そして、毎回、半分原稿はあえなく没となったのでした。

(毎月のように、ろくすっぽ推敲もしていない、勝手気ままな文章を、大量に読まされたことは、白井代表にとつてはさぞや多大な迷惑だったことでしょう。)

これも、いまとなつては懐かしい思い出になりました。

今の時点でわたしの手元には、会報を書くにあつて参考になるかと思われて買つたり、借りたりした読みかけの本が十数冊も溜つてしまっています。自分の怠け心、遊び心からはなかなか脱却できずにいます。まことに困つた性癖ではあるのです。

この15年の間、「ふるさと風の会」を通り過ぎていった人たちは、延べにして数百人以上になることでしょう。読者ともなればこの石岡の人口に匹敵する万単位の人数にはなるのではないでしょうか。

10人にも満たない会員数で、月刊の会報を欠かさず出し続けるというのは、並大抵のことではありません。物理的にも困難があります。

今日までこの会を支えてこられた、S u先輩・U先輩達の活躍にはいつもながら、全く頭が下が

る思いです。

現在の日本では、テレビ・インターネットなどの映像メディアが急速に発達し、活字文化は衰退の一端をたどっています。そして、残念なことには、まともなことの語れる論客も、めっきり少なくなつてきているように見えます。

日本の人口は今後下降の一端をたどりつづけ、それを上回るスピードで、読書人口も減衰していくのは必然のように思えます。

(ひよつとすると、活字文化は滅亡してしまうのではないかと、とさえも感じます。)

さらには、目下流行している、新型コロナウィルスの流行が、人口減に拍車をかけ、一部の伝統文化をあつさり破壊してしまつたようです。

そのような時代の流れのなかにあつて、これはあなどれない数字といえます。

繰り返しになりますが、ささやかな規模ではありながらも、15年間という長きにわたつて継続してきたということは、特筆に値することでしょう。

これからも、この会が存続する限り、脱線し横道に逸れたり、立ち止まつたり、妄想を語つてみたりしながらも、根気よく読んでくださっている読者の方々に向けて、つたない文章を書き続けていくつもりです。

それが今日まで続いてきた「ふるさと風の会」に対して八分の一の責任がある、私の決意ということになります。

15年と言えば、江戸時代の少年が元服し、大人の仲間入りをする年に相当します。また古代中国に於いては、少女が髪にかんざしを差し大人の女の仲間入りする年頃になつたとともにされていま

た。
でき得ればこの会を、20周年まで存続させたい、
というのが目下のささやかな願いでもあります。

【風の談話室】

《読者投稿》

やささと暮らし(51)

さと女

我が家の庭に、いつの間にか黄エビネランが咲
いていた。木の葉に埋もれて、気が付かずごめん
なさい。

一面の緑、麦の穂が大分大きくなり、その周り
ではヒバリの囀りが空高くに・・・「ピーチクパ
ーチク」と賑やかです。Tikoさん「ピーチクパ
ーチク」と、みっこさんにお尻たたかれていますの
かな？覗きに行かなくては・・・。

今日は先日開店した友人の店へ、茨城空港近く
のそらの駅「そ・ら・ら」へ。このお店は「そ・
ら・ら」内のチャレンジショップです。本格喫茶
でコーヒーはサザコーヒーの豆、お昼にサンドイ
ッチといただきますとおいしかったです。お祝い
は竹籠とクラフトの蓑、さっそく使っていました
ました。チャレンジショップ卒業したおりに是非
非八郷にお店を出して・・・。

この辺り一帯は豊後荘病院の広大な敷地です。
理事長さんが一年中花を絶やさないとという方針

だそうです。近所に住んでいる者は楽しませても
らっています。それにしても豊後荘という名前の
由来今度聞いてみようと思います。

なんと美しい、何時までも佇んでいた景色、
昨日はクラフトの仲間と花見。ソメイヨシノは散
り始め、道路は、白い絨毯にこれがまたきれい。
筑波山の方を望むと、まさに、まほろばの里。み
んなで、来年も元気で花見に来ようね、一緒に花
見を楽しんだ先輩は90歳、また、連れて来てね。
みんな頑張ろうね、と分かれた。貴重な集合写真
撮るのを忘れてしまった。

今日の散歩はちよつと裏山に入り、先週下見し
ておいたタラの芽採取。藪をかき分け、かきわけ、
なかなか命がけ。夕食の天ぷらに季節を感じた。
ほんと春のごちそうです。直売所にはまだ出てい
ませんでした。

ほぼ初対面の方が我が家を訪ねて・・・風の
会の会報を毎月楽しみに読んでいるとのこと。そ
の中のエッセイ風のものを書いてある人の事が気
になり、是非お会いしたく、書いてある物から、
近くに飲み屋さんや池が有ることがわかり不安
ながら訪ねて来たという。会報に書いてあるさと
女さんのお宅ですか？と私はキョトンとして、は
いと答えると少しお話しがしたい・・・その後
はすっかり打ち解け、お近づきの記念に出来たて
の竹籠を差し上げた。竹籠たいそう喜んで下さり、
こちらも励みに成った。

爽やかな日が続いている。山々の樹々も濃い緑

色に変わりつつ、其処にヤマフジの紫が彩を添えて
いる。田植えの準備も整い、田んぼに水が入り始
めた。早速カエルの大合唱が始まったよう、連休
中は早速田植え。それにしてもコロナが心配。防
災無線からは毎日のように市内から感染者が出た
との注意喚起の放送があり気持ち晴れませ
ん・・・。遂に石岡も「感染拡大9市町村」に・・・。

天気予報通り、夕方から雷がなり、大粒の雨が
降った後、筑波山の方を見ると山が燃えていた。
東の空には大きな虹がでていた。



おすすめの本 2

燕石(えんせき)

今回紹介する本。

一冊はいわゆる「嫌韓本」の一つ。

著者は産経新聞編集委員、喜多由浩。

「韓国でも日本人は立派だった」

―証言と資料が示す朝鮮統治の偉業―

産経新聞出版 2019・03・05

1960年(昭和35年)生まれ。

正直なところ、あまたある嫌韓本の中では、比

較的ましなほうではないか、と思った。

本文の中で取り上げられているいくつかの項目

には、筆者の知らなかった事例がかなり詳しく描かれている。

例えば、韓国の女性飛行家第一号が、日本の教習教官によって育てられたこと。日韓横断の初単独飛行に挑戦し、離陸直後に、天城山中に墜落して、近年顕彰碑が建てられたこと。第二号も、日本人の手によって誕生したことなど。けれども、一般乗客を乗せて飛べる、飛行免許は与えられなかったことなど、初めて知ることでした。

また、1936年にアドルフ・ヒトラー軍事政権下のドイツで行われたベルリン・オリンピックのマラソンにおいて、孫基廷という朝鮮の選手が見事に金メダルに輝いたことは有名な話である。

しかし、それを報道した朝鮮の新聞社が、孫のユニフォーム写真の日の丸を消して掲載し、関係者が日本の軍・警察に逮捕されたという事実などは知らなかったことだ。

この本で取り上げられている事が、日本の、或いは日本人による善行のみに偏りすぎてはいはしないだろうか。

勿論私は韓国の歴史の専門家でもないし、ただか三年余り、こうした本を読み漁ってきたに過ぎません。

そうはいっても少年時代も含めて、六十年あまりにわたる読書経験からすると、この著者の生まれる以前から、少しずつは韓国・朝鮮のことも目にしてきたので、その知見から行くと、このような記述の仕方というものは、事実関係の立証としては適切とは言えないのです。

もともと、朝鮮に対して、妙な偏見や先入観などはまったく持ち合わせていないので、一読者としては上等の部類に入るのではないかと自負し

てもいます。

次の一冊は、

著者は、大平裕。

「知っていますか、任那日本府」

—韓国がけつして教えない歴史—

PHP研究所

2013・09・25

著者は、大学の法学部を卒業後、古河電気工業常任監査役、を経て大平正義記念財団の代表とある。日本古代史についての著作もある。1939年（昭和14年）生まれ。経歴からすると、大平

正芳元総理と姻戚関係にあるのかもしれない。韓半島に存在したとされる、倭府（任那日本府）

の実在と、歴史を語っている。存在したとされる年代には、日本には文字が存在しなかったため、

検証には、三国史記、などの韓国・中国の古文書また「好太王碑文」などによる他はない。

この本の前半の部分で、韓半島南部に点在する、十二余りの前方後円墳について多くのページを割

いています。

その言わんとするところは、韓国の歴史学者の

多くが、韓国南部に点在する前方後円墳は古代日本の王朝によって齎された物ではないと「誤って主張している」という点にあります。

著者は、地理的に近い九州北部と、韓半島南部をあげて、この地方を支配していた王族が、この

「任那日本府」を中心とする地方までその支配下に置いていたとするのが、正しい認識ではないかと主張しています。

著者は、圧倒的量の文献として「日本書紀」を

上げているが、この書の成立は、当然日本に文字が伝えられて以降の事となり、この本に書かれている事例だけをもって、二、三世紀での「任那日

本府」の成立時期を証明・検証するのはかなり無理がある。

また韓国の歴史学者の多くが、「任那日本府」の存在を、否定的かつ無視していると、批判もしている。日本の歴史学者の多くが「左翼思想」に染まり「日本書紀」の記述のほとんどを神話として、古代史の領域では軽んじているのではないかと、とさかんに憤っている。

この本にも一部引用されていた、司馬遼太郎によれば、この地方に「大和王権」初期の植民地的な領土があったとする説はとつていません。大平氏の言い方からすると、司馬遼太郎も、「左翼」思想の持主ということになってしまいます。

自説に都合のいい部分だけ引用し、よく読めば大平氏の主張とは真つ向から対立していることは明らかです。我田引水もいいところですよ。

こういういい加減なことを平気で書くから、本好きになわたしが、いわゆる歴史家の本を今まで読んでこなかった大きな理由なのです。

もう三冊目は、

歴史教育者協議会 編

「知っておきたい 韓国・朝鮮」

青木書店

1992・05・30

この本は、韓国・朝鮮の歴史を、時系列に沿って紹介しています。

一冊目、二冊目の著者たちが大嫌いなグループによる著作です。したがって、どちらの本も当然のごとく一行も引用していません。

今回これ等、市立図書館で借りてきた本を、得意の飛ばし読みでもって読み比べてみた。

そもそも、ハウツー本などはわざわざ買って読む価値などないしお金と時間の無駄でしかない、というのが、小生の長年の持論でもあります。しかも飛ばし読みしてしまうとは、ね。

(出版関係の皆様方、ごめんなさい(笑))

歴史的な事実は、しばしば時代状況や様々な制約によって、後日簡単に改変されてしまうものです。つまりは、眉に唾しながら、注意深く読まなければならぬということです。そうでないと、あつさり誤謬に陥ってしまうからです。

それが歴史を語るものの、最低の基礎ではないでしょうか。先入観や常識などをすべてかなぐり捨てたところから、研究というものは始まるしかないのだと想うのです。

私が書籍や論考に對した時に、判断する物差しの一つとして使っているのは、第二次世界大戦における日本の大敗北を、「敗戦」というか、「終戦」というかです。

歴史認識の判断に限らず、最低限の常識というカールのようなものがあり、そこでしか討論する余地はありません。それでなければ、ひとりよがりのまつたく不毛な「水掛け論」で終わってしまうこととなります。

透徹した思考の延長線上に、ようやくかすかに真相らしきものが浮かんでくる。そうは思いませんか？

蛇足として。

作家・司馬遼太郎は、学徒出陣組の一人として、即製の教育によって、旧・日本陸軍少尉となって、

朝鮮に渡る。其の後、ソ満国境を守る関東軍の戦車聯隊の小隊長となって4台の戦車を指揮しています。

当時の日本軍の戦車の技術レベルは、第一次大戦に初めて登場した戦車からさほど進化しておらず、到底、欧米或いはソ連の戦車に太刀打ちできない代物ではありませんでした。これらのことは、司馬氏自身も随筆の中で書いています。

「竜馬がゆく」をはじめ司馬作品はずいぶん読んだけれど、ある時を境に読むのをやめてしまいました。

それというのも、第二次世界大戦末期、一下級将校として徴兵され、朝鮮から旧満州にかけて従軍し戦場の実態を知っていた経験があるにもかかわらず、それをほとんど書いておらず、明治以前の歴史物に逃げてしまったような見えただけである。

多くの戦中派の作家たちが、自身の体験から様々な戦記文字を残している。その中であって、あれほどの筆力がありながら、書いたものと言え「街道をゆく」という随筆集のなかで少しふれているだけです。

今回のものは、お勧めの本ではありません。そうはいっても、読みませずにあれこれと語るのとは反則ですから、何処やらでさんさん聞かされたような「またか」と思わせる、何の役にも立たない論旨の展開に、ほとほとうんざりしながらもようやく読み終えた次第です。

ハウツー本が、いかにつまらない存在かを強調して言いたがために、サンプルとしてここに挙げてみた次第です。

〈ニュース報道の問題点〉

朝のニュース番組を、チャンネルをせわしなく動かしながら見ていた。

新型コロナウイルスに関連して、血液中の濃度が自分でも計れる機器を、メーカーが増産する計画であるという。なるほど便利な時代になったものだ、と感心して、続きのニュースを見ていた。

大手メーカーの生産量は、去年の20倍、別なメーカーは去年の3倍だということだ。

「そうすると、これからは何台に増えるのかな？」と、注目して見ていたら、ニュースはそこで尻切れトンボで終わってしまった。番組の終わりに、経済の解説員が出てきて同じニュースを流しましたが、やはり全く同じことの繰り返しでした。これはニュースとしての価値が全然なく、失望しました。

さすがは、天下のNHKさんですな、というしかありません。

以前にも書いたと思うけれども、ニュース報道の劣化はひどいものがあります。「大本营発表」のような報道を毎日、無批判に垂れ流しているだけの存在でしかありません。

昨日(4月4日)あたりからの、朝のニュースによると、大阪の新型コロナウイルスの1日の感染者数が東京を抜いて全国一となったという。「東京都」と並んで「大阪都」になりたいとしきりに騒いでいる面々に取っては、これは内心はうれしいニュースなんではないの？

冗談はさておき、先ごろ国会で改正された、「ま

ん防（感染症蔓延防止等重点措置）が、4月1日から発令されるに至り、それにもなつて「見回り隊」という連中が、4万軒ある飲食店を見回り、違反店舗の指導・摘発に乗り出した。

これに違反すれば、容赦なく罰金が科される。いずれは民間委託も検討しているとのこと、かつてこの国で行われていた、「隣組」組織に似た相互監視・密告という悪夢のような体制を再び甦らせようともいうのだろうか？密告者には奨励金を払う、或いは顕彰するなどの形が取られるようになるのだろうか？仮にそうならば、もはやおしまいだ。

海にぶかぶかと浮かぶマンボウは、きわめておとなしいユーモラスな魚だが、こちらのまん防は、ユーモアのかけらもない、ちつともおかしみもないものだ。

全くのところ、今の世の中、ますますもつて嫌な空気になってきたものだと思う。

〈天才スイマーの復帰〉

もうひとつ、各放送局で繰り返し流されていたのが、2年前に白血病と診断され、水泳界から姿を消していた、天才的スイマー・池江璃花子選手の復活劇のニュース。

久々の明るいニュースでした。

いくら「スポーツ音痴」の小生でも、彼女の名前は知っています。（笑）

奇跡的な回復を果たし、大方の予想を裏切つて、オリンピック代表に内定しました。

池江選手は報道陣のカメラに向かって、うれし涙で復活の喜びを語りかけていましたが、闘病生

活のあまりにも過酷な日々、いつもは気丈にふるまっている彼女も、涙があふれるのを抑えきれなかったようです。

彼女のこれまでの内面の葛藤は、想像に余りあるものがあります。おなじ白血病に苦しむ人々にとつては希望の光を与えたことでしょう。これは特筆すべきことだと思ふのです。

再発しないことを祈るのみです。

トラブル続きの東京オリンピックを、何とか実現したいと考えている人たちにとつては、これほど喜ばしいビッグ・ニュースは、またとないことでしょう。しかも日本水連では、とうとうコロナのクラスターが発生した状況下でもあります。

様々なスポーツ選手のなかからも、連日のように感染者が出ています。

「オリンピック・ファースト」の彼らにとつては、コロナの犠牲者がどんなに増えようとも、なんとんでもオリンピックを開催したいというのが、なによりもの使命になってしまっているということなのでしょうね。

ニュースでは、連日、聖火リレーの話題。成果を持つて走る人たちの感動的エピソードもこれでもかとばかり流される。

いつそのこと、新型コロナウイルスから奇跡的に回復した方を、聖火リレーの最終ランナーに選んで、国立競技場の聖火台に点火するという「感動的な」演出なんかはどうでしょうかねえ？JOCの皆さん

〈子ども庁〉

またぞろ、人気取りの変なことを言い出した。省庁の枠組みを取り払つて、子供のための機関を創設するそうだ。

一つお聞きしたいのですが、幼稚園と保育園はそれぞれ文部科学省と、厚生労働省の別々な所管になっていきます。

この統合ができるのでしょうか？それぞれの省の官僚からの頑強な抵抗があるだろうに。

子ども庁の長官が、「子供」のような発言でもするんじゃないかと今からはらはらして心配しています。

以前も書いたけれど、子供と動物をダシにするのは、CM作りの常套手段となっています。

次には、徳川綱吉に倣つて「生類憐み庁」でも作りますか。（笑）

茨城県の難読地名とその由来（14）

木村進

潮来【いたこ】

潮来市

読みづらい地名も見慣れてしまうと、あっさり読めてしまいます。

でもどこかその由来もわかっているようで判らない。そんな地名はよくありますね。

この「潮来」などはその代表でしょうか。

「潮来」は【いたこ】と読みますが、江戸時代始めは「板久」や「板来」と書いていました。それをこの地が水戸藩領ということで、この地を視察した徳川光圀（みつくに…水戸黄門）が1698年

に「潮来」に改めさせました。歴史的に判っていることを順に記しておきましょう。

★「常陸国風土記」【板来】【伊多久】

(1) 「此より南十里に板来の村あり。近く海浜に臨みて、駅家を安置（お）けり。此を板来の駅と謂ふ」この板来駅家（いたこのうまや）は常陸国国府（現石岡）から鹿島までの官道として馬を常駐した駅として利用されたが、弘仁6年（815年）12月22日に廃止された。この駅家のあった場所は旧板来村または旧辻村（津知村）と考えられており、現在、潮来にある長勝寺の境内に「板来駅家の跡」の碑が置かれている。ただ実際は辻（津知）村であった可能性も高い。

(2) 「建借間命（たけかしまのみこと）、騎士をして堡（とりで）を閤（と）ぢしめ、夜より襲ひ撃ちて、尽に種族を囚へ、一時に焚き滅しき。此の時、痛く殺すと言ひし所は、今、伊多久（いたく）の郷と謂ひ」

このように常陸国風土記では、ヤマト朝廷の東国進出時に、この潮来周辺にいた現地人（国栖・くず）の夜尺斯（やさかし）、夜筑斯（やつくし）という2つの現地族が強力に抵抗したため、これを策略をもっておびき出して皆殺し（焼き殺し）にしたという言い伝えから、痛く殺したということで地名が「伊多久（板来）」となったとしています。

★和名抄（平安時代の辞書）【板来郷】（板来郷の間違いか）

「板来郷」とあり、読みは書かれていない。新編常陸誌はこの「板来」は「板来」の書き間違いだとしている。

★南北朝時代【いたく】

応安年間頃の海夫注文に「いたくの津」とある。★江戸時代

・水戸領郷高帳（1633年）、元禄郷帳（1700～1702年）：【板久村】

・水戸光圀による改名（1698年）【潮来】

元禄11年（1698）、鹿島に「潮宮」があり、水戸光圀は、常陸の方言で「潮」を「いた」と読むことに興味をおぼえたため、「板来」→「潮来」に改名した。これによれば、江戸時代初期頃は「板久村」と書かれており、1700年頃から正式村名が「潮来」に変わっていったと考えられます。また光圀が気になった名前という「潮宮（いたみや）」は、鹿島神宮の摂社に「潮宮」があり、神社としては正暦3年（992年）に小美玉市倉敷地区に遷祀したとされ、現在もこの倉敷地区に残されています。現在の鹿島神宮には境外末社に潮宮があります。この潮宮（いたのみや）を祀っている「潮社（いたのやしる）」が高天原地区にあります。

さてここまで判っている内容で、地名由来も常陸国風土記に書かれている「痛く殺したので板久となった」というのが本当だろうと思ってしまう。

しかし、これもあくまでも風土記の書かれた8世紀初頭の地域に伝わる伝承です。

実際はきつともっと違った意味合いがあるのだと思われまます。「イタク」「イタク」などの発音にあった解釈を探すと、やはり地形により古アイヌ語になりそうです。

・「痛んだ場所」痛（イタ）・処（ク） という地形から「イタク」と呼ばれた。

・古代は伊良盧（いらら）と呼ばれ、このイラゴが「イタク」に変化した。

イラゴ、イラコとは「粗い砂粒」を示すのではないかと言う。

一方、「久」と「来」が両方出てきますが、どうもこれは古代の地名には「久」と「来」は同じような発音だったのかもしれない。恐らく「来」は「コ」ではなく「ク」と発音していたものと考えられます。「板来」→「いたく」です。

常陸国風土記の信太郡のところに、「碓氷から西に行く」と高来（たかく）の里がある」という記述があります。この「高来（たかく）」は現在の阿見町の「竹来（たかく）」とみなされています。「来」→「ク」です。この考え方だと伊良盧（いらら）説は「く」とは読みづらいですので、地名由来としては考えにくいです。では実際はというとよくわかりません。

青森県恐山のイタクという死んだ人呼び寄せる（口寄せ）という巫女がありますが、この言葉の由来としてはアイヌ語のイタクが「語る」という意味であり、この「イタク」が「イタク」になったとする説があるといえます。

こちらもイタクがイタクになっていますので、同じ意味合いがあるのかもしれませんが。ただ、これを裏付けるものはありません。

瓜連【うりづら】 那珂市

瓜連【うりづら】は茨城県の方は多くの人が読めるようですが、他県の方は読み方に迷うことでしょう。

「ウリ」は古代語で「丘」のこと。そのため、瓜連は丘が連なるという意味だとされます。

北海道の鹿追町瓜幕（うりまく）は丘の裏側という意味だといえます。

- ・北海道上磯郡木古内町瓜谷（うりや）
- ・北海道河東郡鹿追町瓜幕（うりまく）
- ・宮城県石巻市大瓜（おうり）
- ・宮城県黒川郡大衡村大瓜（おおうり）
- ・福島県郡山市土瓜（つちうり）
- ・茨城県那珂市瓜連（うりづら）
- ・栃木県真岡市勝瓜（かつうり）
- ・千葉県木更津市瓜倉（うりくら）
- ・千葉県佐倉市瓜坪新田（うりつぼしんでん）
- ・新潟県長岡市瓜生（うりゆう）
- ・新潟県佐渡市新穂瓜生屋（にいぼうりゆうや）
- ・石川県河北郡津幡町瓜生（うりゆう）
- ・福井県あわら市瓜生（うりゆう）
- ・福井県越前市瓜生町（うりゆうちよう）
- ・福井県越前市瓜生野町（うりゆうのちよう）
- ・福井県坂井市丸岡町西瓜屋（にしうりや）
- ・福井県三方上中郡若狭町瓜生（うりゆう）
- ・岐阜県高山市国府町瓜巢（うりす）
- ・岐阜県高山市丹生川町瓜田（うりだ）
- ・静岡県浜松市中区瓜内町（うりうちちよう）
- ・静岡県浜松市南区瓜内町（うりうちちよう）
- ・静岡県富士市瓜島（うりじま）
- ・静岡県富士市瓜島町（うりじまちよう）
- ・静岡県伊豆市瓜生野（うりゆうの）
- ・愛知県豊橋市瓜郷町（うりごうちちよう）
- ・滋賀県長浜市瓜生町（うりゆうちちよう）
- ・滋賀県東近江市瓜生津町（うりうじちちよう）
- ・京都府京都市上京区木瓜原町（ぼけはらちちよう）
- ・京都府京都市左京区北白川瓜生山町（うりゆうざんちちよう）
- ・京都府南丹市園部町瓜生野（うりうの）

- ・大阪府大阪市平野区瓜破（うりわり）
- ・大阪府東大阪市瓜生堂（うりゆうどう）
- ・兵庫県相生市矢野町瓜生（うりゆう）
- ・岡山県津山市瓜生原（うりゆうばら）
- ・山口県宇部市瓜生野（うりゆうの）
- ・高知県長岡郡本山町瓜生野（うりうの）
- ・高知県吾川郡仁淀川町用居乙瓜生野（うりうの）
- ・佐賀県唐津市肥前町瓜ヶ坂（うりがさか）
- ・大分県竹田市荻町瓜作（うりつくり）
- ・宮崎県宮崎市瓜生野（うりゆうの）
- 瓜生Ⅱうりゆう、うりう 瓜生野Ⅱうりゆうの、うりうの という地名がかなり多い。
- これらのうちどれくらいが 瓜Ⅱ丘 というような意味がある地名かについては不明だが、食べるウリという意味合いのところも多そうだ。但し、「ウリュウ」となると別な漢字の地名（宇龍、雨竜など）もあり、一概に瓜（ウリ）とは限らないようだ。

常陸旧地考（11）

菊地孝夫

下巻（四）

○阿波山上神社

神名帳に那賀郡七座小五座、阿波山上神社あり、小社なり、

今茨城郡の大山村の鎮守神をこの神社なりといえり。

國誌にも、在那珂郡とのみあるは、当時定かに分かりてぞアリけらし、

さてこの大山村は、那珂川の南につらなりて、今は茨城郡なれども、那珂の地なるべき様なり。

これ成ること疑いなるべし。
さてアハ山とオホ山と音近ければ、訛り遂に文字をも大山と書き換えたものなるべし。

社伝に祭神少彦名神なりといえり。
日本紀、神代卷に、少彦名命淡島に到り粟茎縁は即彈渡、常世郷に到る云々トアルによるなるべし。

和名鈔に、那賀郡阿波郷あり、風土記に粟河有同地成るべし。

三代実録に、仁和二年（886）二月九日癸丑、常陸國從五位下、阿波神從五位下云々

神名帳に、山城国綴喜郡粟神社、和泉国泉郡粟神社、伊賀国山田郡阿波神社、伊豆国加茂郡阿波神社など有り。

○酒烈礪前薬師菩薩明神社 さかつらいそさきくすし

神名帳に那珂郡七座大二座。酒烈礪前薬師菩薩明神社（大明神）あり

さて今那珂郡の平磯村の鎮守神惟なりといえり。國誌に酒烈礪前薬師菩薩明神社、那賀郡にあり、いま滅びたり云々。

寛文三年（1663）秋平磯邑の人古塚を発き、石棺を得る。棺の内に種々の器物有、甲冑の如きもの旗竿のごときもの、また一振り of 太刀、一振りの短鉾、陶器二三個あり。塚の外四面数百歩のところみな陶器埋まり牆址の如し。

老父相伝礪前明神跡なりという云々見えたり、当時早く廢れて、定かには知られずアリけむ。さらば今の宮づくりはこの寛文の後のもの成り、いつの頃の造営にやあらん。

文徳實録に、天安元年（857）八月乙丑朔辛

未常陸國大洗磯前酒烈磯前神など官社預云々。

また冬十月、乙丑朔巳卯常陸國大洗磯前酒烈磯前の両神薬師菩薩名神と号云々

○藤内神社

神名帳に那珂郡七座小五座。藤内神社あり、小社なり

さていま茨城郡の藤井村の鎮守神これなりといえるはいかあらん、さだめがたし。

國誌に藤内神社「今不知其在所」とあれば當時早く廢れて知られず有なむ

○石船神社

神名帳に那賀郡七座小五座石船神社あり、小社なり

さていま茨城郡の石舟村の鎮守神これなりといえり。

國誌にも石船神社、在那珂郡今属茨城郡と見えたり。

この石舟村は茨城郡の西北の角下野国に近ければ那珂郡に属すべき様なり。ことに村名の石舟というにても、石舟村の石舟神社なること疑いなし。

三代実録に貞觀元年（859）四月二十六日辛亥常陸國正六位上、石船神社云々並びに従五位下を授く云々。

○稲田神社

神名帳に新治郡三座大一座稲田神社大明神あり。今茨城郡の稲田村の稲田姫明神これなり。さて

いま茨城郡につきたれど、このあたり古くは新治銀の地なるべき様なり即ち稲田村の稲田神社なる

こと疑いなし。

國誌に稲田神社在新治郡とのみあれば國誌選ばれし頃までは、新治郡にてぞありけらし。その後今のごとく茨城郡にはなりしなるべし。

稲田姫神は素戔嗚尊の御妃にて古事記に櫛名田比賣また日本紀に奇稲田媛。同書の一書にもただ稲田とのみもある。この神なり。

いまの世にこの社近く、八瓶山と言え在りて、所々に瓶あり、これは素戔嗚尊の出雲国にて櫛名田比賣のために蛇を退治したまいし時、八塩折の酒を八つの瓶に酒船に盛りて退治し給いし故事のあるによりて後世人の偽り設けたるものなり。無下に近き世のことと見えたり。

神名帳に、山城国相楽郡綺原にいます伊那太比賣神社、能登国能登郡久志伊那太伎比賣神社、等見えたり。

また出雲風土記に久志伊那太美等譽麻奴良比賣命というも見えたり。

久志伊那太美等譽麻奴良比賣命…くしいなだみとよまぬらひめのみこと

【特別企画】

打田昇三の太平記（9） 卷第四・2

○先帝遷幸（せんていせんこう）の事

天皇と中宮とが、どれほど別れを惜しもうとも後醍醐天皇の流罪は幕府の決定事項であるから変

更は無い。当日は千葉介貞胤（ちばのすけさだたね）、小山五郎左衛門、佐々木佐渡判官入道道誉の三武將が五百余騎で道中を警護し、後醍醐天皇を隠岐の島刑務所へ遷す作業に掛かったのである。

当然、警護と言っても、天皇方の武士に奪われないようにする目的である。原文に「遷し奉る」と丁寧書かれてはいるが、一般的に言えば「罪人として天皇を隠岐の島刑務所へ収監した」のである。一条頭大夫行房と六条少将忠頭が従い、更に女官一人が身の廻りの世話をする…というサービスピス付きであるが是では刑罰の意味がない。そういうところが日本人の精神的中途半端な欠点である。

付添いの三人以外は、完全武装の者が天皇を乗せた囚人車の前後左右を取り囲み、京都七条を西に行き更に東洞院を下って行く。此の行列を京都中の男女が道の両側に並んで見送った…と言うよりも見学をした。原文には「…正しき一天の主を下として流し奉る事の浅ましきよ！武家の命運も今に尽きなん…と憚ること無く言う声が巷に満ちて…」と書いてあるが、武家の天下はそれから五百年も続いたのであるから、所詮は愚かな人間社会の権力闘争に過ぎないことになる。

囚人行列が奈良盆地南東部櫻井の宿を過ぎる際には天皇の希望で八幡社に参詣して再び京の都に戻れることを祈念した。八幡社に祭祀されているのは應神天皇とされるから後醍醐天皇のことも護つてくれるであろうと勝手に決めたらしい。神戸市中央部の湊川を過ぎる時には、かつて平清盛が此の地・福原に都を遷してから程なく平家が滅亡したことを思い、此の湿地帯に都を置いた行為が平家の奢りに依る天罰であろうと、暗に北条氏の専横を諷（そし）る心になって少しは気が晴れた。

須磨の浦では架空の人物ながら光源氏が朧月夜との浮き名を立てて三年の間、此の地に流されたことを思い、其の場に立って涙ぐんだ(馬鹿か！)

明石の浦の朝霧に遠くなりゆく淡路潟、波打ち寄せる高砂の濱、やがて美作国(岡山北東部)に入ると、遙か遠方に雪が残る山が見えたので警護の武士に訊ねると「伯耆の国の大山(だいせん・一七二九メートル)…」と答えた。霊山と言われたので、暫く輿を止めさせて無事を祈った。天皇護送であるから特に用心して速度を速めた訳ではないが、都を出てから十三日目に御一行様は出雲の見尾湊(境港市)へ到着した。此処からは隠岐の島に向かう風待ちの日が続いたのである。

○備後三郎高德の事、付・呉越軍(いくさ)の事

その頃、備前国(岡山県南東部)に、見島備後三郎高德(こじまびんごさぶろうたかのり)と言う者が居た。後醍醐天皇が笠置に居た頃に天皇方として兵を挙げたのだが応援に向かう途中で「笠置が落ち楠木も自害した！」と聞いたから地元で死んだふりをしていたのである。そこに、思いがけず後醍醐天皇が隠岐の国へ流される(境港に居る)という情報を聞いたので、一族の中から信頼の出来る者を集め、その席で演説をした。

「志士・仁人は(目的の為に)生を求めず、以て仁を害する事無し。身を殺して仁を為すこと有りと言う。されば、その昔、中国では(春秋戦国時代・紀元前四・五世紀)衛の懿公(えいのいこう)が北狄(ほくてき||北方の賊)に殺害されたのを見て、臣下の弘演が切腹し、懿公の肝を自分の身体に納め先君の恩を死後に報じたという。

“義を見てせざるは勇無きなり”いざ、是より臨幸の途中で幕府から天皇を奪い取り、大軍を擁

して戦い、たとい屍(かばね)を戦場に晒すとも名を子孫に伝えよう！」

是に対して一族の者が賛成したので早速に作戦を立て、途中の難所で待ち伏せすることにした。選ばれた場所は、美作(みまさか)の国・杉坂という名前を聞いただけでも疲れる様な場所であるが襲撃には都合が良い。現在の岡山県北部と思われる。幕府側に知られない様にと三石山から山道を抜けて現場へ着いたのだが、天皇護送隊は既に美作国院の庄(津山市)に入ってしまった。

宿泊先付近をうろついたので、役人に見つかる恐れもあったので、公衆道徳には反するが庭先の桜の幹を削って「天勾踐を虚(むな)しゅうする勿れ。時に、范蠡(はんらい)無きにしても有らず」と書き付けて来た。翌朝、警護の武士が是を見つけたけれども、難しい漢字にフリガナが付いて無いから読めない。誰が書いたか調べることよりも何と読むか！大騒ぎをしているのを天皇が見て其の意を察したが黙っていた。天皇は知っていたが、古代中国の話であるから当時は多くの者が知らない。太平記の本筋からは外れるが、原本に有るので全部を書くこととする。

—紀元前四百年代の中国で「呉」と「越」の二国が争っていた。両国の支配者たちは国民の事など考えず、戦争による領土拡張しか頭に無いから明けても暮れても合戦を繰り返すこと何年にも及んだ。当然ながら両国は宿敵同士となる。

呉の国の王は「夫差(ふさ)」と言い、越の国のボスは「勾踐(こうせん)」である。勾踐は好戦に通じるのか、或る時に大臣の范蠡(はんらい)を呼んで「…呉の国は父祖の敵である。是を討たずに歳月を送るのは天下に恥を晒すのみならず父祖

の霊に対して顔向けが出来ない。よって私は兵を率い呉国に攻め入ろうと思う。そなたは国に留まり防衛に専念すべし」と命じた。

単に留守番を頼まれた訳では無いから范蠡大臣は驚き、王を諫めて言った。「…我が国状と呉国とを比べると、呉の兵力は二十万騎、我が軍は十万騎です。兵力が半分では“小を以て大に敵せず”呉国に勝つ事は出来ません。更に時節を考慮すれば春夏は陽の時ですから忠賞を行い、秋冬は陰の時なので刑罰を明らかにすると言われており、今は春の始め、遠征の時期では無いので攻め込んでも勝利は得られないでしょう…聞く所によれば呉王夫差の下には“伍子胥(ごししよ)”と言う智略に優れた人物が居て人望が有り、良く呉王を援け、知恵を授けているそうです。此の人物が居る限りは彼の国を滅ぼすことは難しいと思います。

麒麟(きりん||想像上の動物)は角(つの)に肉有りて猛き形を現さず、潜龍(せんりゅう||天に昇る前の龍)は三冬に蟄居して一陽来復の天を待つと言われるように、御主君が天下を望まれるのであれば暫くは辛抱して兵力を伏せ、武器を隠し決起の時期を待つのが上策と存じます…」

是を聞いて「成る程…」と思う様な王様なら良いのだが、麒麟でも龍でも無く河馬(かば)を逆さまにしたような王様は怒って「…古書に父の仇は共に天を戴かず！とある。我は既に壮年に及ぶまで呉の国を討つことが出来なかつた。是は人として恥ずべきことである。汝が我を諫めることは理に叶わず、勝負は時の運により、兵力の多寡に拠らない。今、此処で決起しなければ父祖の仇を討つことが永久に出来なくなる…」とか、何とか屁理屈を述べ立てて遠征を強行したのである。

西暦紀元前五百年代前後の事と思われるが冬の終り頃に十万余の軍勢を率いた越王勾踐は呉の国に侵入した。是を知った呉王（夫差）は自ら二十万騎を率いて国境に赴き、中国浙江省の会稽山麓に布陣した。ただし、二十万のうち三万だけを店頭に並べ、十七万騎は隠して置いたのである。

越王が見ると（誰が見ても同じだが）敵の勢力は三万程である。思いの他に小勢だと軽視して十萬の軍勢を一斉に渡河させた。大陸の二月であるから河水は氷の様に冷たい。馬も人も凍えて戦さどころでは無い。呉の兵はわざと退いて会稽山に引き籠った。越の兵は、其れを真面目に追い掛けること三十余里（古代の一里は五、六百メートルらしい）日が暮れる頃には呉の兵が、追い掛けて来た敵を山中の難所に取り込めて攻撃した。当然ながら攻めて来た越の軍勢は七万余が討たれ残る三万も多くは負傷者という見事な敗戦となったのである。此の時に戦った両国の近辺にいた弱小国の多くは当然ながら勝った方に味方したらしい。越王は残る兵を集め「我が運命は既に尽きて敵に囲まれた。是は合戦の所為では無い。天が我を滅ぼしたのである。明日は残る兵力で呉王の陣（敵軍）に突入し屍を軍門に晒して後の世に恨みを残そう」と言つて武器を焼き捨てようとした。更に陣中に行方不明になっていた八歳の息子と呼んで自害させようとしたところ、將軍の一人で大夫種と言者が進み出て趙王を止め「今、我々を包圍している敵軍の大将・太宰嚭（だざいひ）は、私の古い友人です。聞くところによれば呉の王は知恵が浅く欲の深い人物らしいので敵將・太宰嚭を通じて自分が呉王を欺き、此の危機を何とかします。無事に本国へ帰還して再起を図りましょう」と

提案をし、是に越王が同意した。

大夫種は言葉が続いて「然しながら現在の様な危機に陥ったのは（越王が）忠臣・范蠡の忠告を聞かずに兵を出したからです。どうか、此の事を忘れないようにしてください！」と諫めた。其のとおりであるから、越王も黙って肯く他は無い。大夫種は王命を受けて敵軍との交渉に臨むべく、兜を脱ぎ旗を巻き、和平交渉に向かう姿で「越王は呉軍に降伏致す！」と叫びながら會稽山から馳せ下つて呉軍陣営の門に掛け込んだ。是を見た呉の軍勢三十万騎が勝鬨（かちどき）を挙げ万歳を唱えた」と原文に書いてあるが、状況が全員に伝わるには時間が掛かったであろう。

それでも大夫種は憶する事無く堂々と「君王の陪臣（間接的な家臣）、越の勾踐の従者・小臣（身分が高く無い）種が、謹んで呉軍の上將軍隷属下に身を置かせて頂き、拝謁の榮を賜りたくお願い申し上げます」と名乗り、座して頭を垂れながら太宰嚭の陣幕前まで膝行してから平伏した。太宰嚭は床に座していたが周りの陣幕を上げさせて大夫種を謁見した。大夫種は顔を上げず涙を流して使者の口上を申し上げた。

「寡君（小国の王）勾踐、運極まり勢尽きて呉軍に包圍されました。そこで今、私の様な身分の低い者を頼つて呉王に服従を誓い末長く王の臣下となることを請願致しております。願わくは是までの罪を御赦免頂き、死罪をお救い頂ければ、領国・越を呉王に献じて湯沐（とうもく）の地（別荘地・保養地）とされますように、更に越国の宝物や武器を差し出し、国中の美人を集めて宮中に置かれるように手配を致します。もし此の請願が受け入れられず、王・勾踐が罪に問われるのであ

れば保有する武器などを焼き捨て、叶わぬまでも全軍の兵が心を一にして呉王の堅陣に攻め込み軍門に屍（かばね）を晒す覚悟のようです。

私はかねてから將軍に御厚誼を頂いておりますが越王とも親しくさせて頂いているので、現在、苦境に立たされた越王のことを案じて、無理なお願いと承知しながら此処に参上致しました。」

考えて見ると強引に征服するよりも降伏する敵を程々に許した方が得なので呉王は「よかろう」と返事をした。大夫種は喜んで會稽山に戻り報告したので全員が萬死に一生を得た思いであった。

やがて越の兵も呉の兵も引き揚げた。勾踐こと越の太子も「呉の家臣」と称して謙虚な態度をとり大夫種に付けて本国に帰される筈なのだが、呉王は気を許さず面会を許さない。更に手足を拘束して土牢に閉じ込めた。洞窟の様な牢であるから陽も射さず、歳月の経過も分からない。

越の国に帰った范蠡は此の事を聞き呉王を恨んで「何としても越王を助け出し會稽山の恥辱を雪（そそ）ごう」と決意した。其処で呉の国に行き魚商人に身を変えて勾踐が収容されている牢獄の場所を探り当てた。当然だが警備が厳重で侵入は出来ないが、堀越しに牢の窓が見えるので商売物の魚の腹を裂き短文の詩を隠して投げ込んだ。窓から降つて来た魚に勾踐は驚いたが、腹中の手紙に気付いて見ると范蠡が救出作戦を企てていることを知る。勾踐は范蠡の志を有難く感じて生き延びる氣力を回復したのである。

話としては出来過ぎているのだが、其の時期に呉王が急病に罹った。「石淋（せきりん）」と言う原因不明の病気で医師も治療出来ない。当然、御祈祷も効かない。その時に他国から来たと言う医

師が話を聞いて「石淋を治すには石淋と言う薬を与えれば良い」と言った。その話が王宮に聞こえたのだが「石淋が何か？」知る者が居ない。

其の話を牢獄で聞いた勾踐は牢番に「私は石淋を知っています」と申し出た。牢番は役人に報告し、それが重役に知らされたから、王宮に持ち込まれていた幾種類もの怪しい石や薬草などが牢内に運ばれ、其れを勾踐が慎重に鑑別した。

その結果、石淋の効果で呉王の病気が平癒したので勾踐は牢から出され更に本国・越を返還して貰えることになった。その時に呉王の家臣・伍子胥（ごししよ）が勾踐を警戒し、「千里の野辺に虎を放つもの」と釈放に反対したのだが、呉王は聞かなかつた。勾踐は帰国用の車を与えられ三年ぶりに故国の地に立つことが出来たのである。

勾踐の車が越の国に入ると、無数の蛙が其れを取り囲んだと言う。勾踐は「勇士を得て素懐（目的）を達すべき瑞相である」と、車を下りて蛙の群れを拝んだと言うが「蛙」を「帰る」に掛けただけのことであろう。王宮に行つて見ると三年間も放置されていた為に手入れする者も無く、庭に枯葉が重なり野鳥や狐狸が巢を造っていた。

やがて越王帰還の事が知れ渡ると、隠れていた旧臣たちが少しずつ集まって来たので、越王は先ず重臣の范蠡ら呼び寄せて国家再建策を協議する事とした。越王には何人かの后（きさき）が居たらしいが西施（せいし）と言う美人が特に寵愛されており、王が呉に捕らわれた間は何処かに避難していた。王の帰国を知り宮中へ戻ったのだが三年も経っているから少しは品質が落ちていてあるろうと誰もが思った。ところが、城に駆け付けて来た姿は全く変わりが無く一層、艶やかさを増

した様に思えるほどであった。是で万事目出度しと一同が喜んだのだが、其処に呉の国から使者が来た。越王は何事であろうかと、范蠡を呼んで用件を聞かせると次の様な理不尽な要求を突き付けて来たのである。

「我が君王（呉王夫差）は淫を好み女色を重んじ常に美人を探して居られる事は天下に知られている。然しながら越国の西施ほどの美女は居ない」と言う噂を聞いた。先に越王が会稽山で包囲された際に降伏の条件として西施を差し出すと約束した筈だが（呉国の言いがかり？）、呉王は速やかに西施を呉の後宮に入れよ！との仰せである。さすれば西施は呉国后妃に据えられる…」

是を聞いた越王は呆れながら「自分が恥を忍んで呉の陣営に下つたのは国土を保ち身が助かる為では無く只々、西施に再会する機会を得たいのである。よつて此処で呉の国との講和が破れて再び捕虜になるとも西施を他国に送ることは無い！」と周囲の者に言い切つたのである。其れを聞いた范蠡は涙を流して越王を戒めた。

「ご主君の思ひは我ら臣下の者も同じであり悲しむべきことですが、此処で御主君が西施を惜しまれて呉の要求を蹴つた場合には、此の国が攻め滅ぼされるばかりでなく、西施も奪われる結果になることは必定です。それよりも此処で呉王の要求に従つておけば、呉王は西施の色香に迷ひ国政を疎かにすることは明白です。呉国が弱体化した其の時に呉を攻めれば必ずや勝利するでしょう。其れでこそ越国が生き残り、西施を取り返す事が出来る方法です…」

理に叶つた其の言葉に越王も納得する他は無く西施は人質とも違う微妙な立場で呉の国へ送り込

まれたのである。原文に「未だ幼き太子・王麤興（おうせきよ）にも言い知らせず」とあるから、それは西施の産んだ子かも知れない。其の子にも越王にも越の国の重臣たちにも悲痛な思いを残して連行される様に西施は呉の国へと向かつた。

此の西施と言う女性には天下第一の美人と言われ正装して微笑すれば百人の媚びよりも君主を迷わせ地上に花が無いかと思わせる。相手が僅かに見ただけでも千人の心を瞬時に陶醉させて雲間に月を失う思いをさせる。そういう容姿であつたから後宮へ入れた呉王は忽ちに心奪われ、現在の蘇州近くに姑蘇台という離宮を造営し、昼夜を分かたず西施を傍に置いて淫楽遊宴に耽り、国政を顧みることが無くなつたのである。是に対し取り巻きの臣は意見せず（王の怒りを恐れて）、辛うじて参謀格の伍子胥が諫めて言つた。

「其の昔、殷の紂王（いんのちゆうおう）紀元前千年代・中国王朝の王）は、姫妃（だつき）紂王の寵妃・毒婦と言われる）の色香に迷つて世を乱し、周の幽王（紀元前七百年代）は褒姒（ほうじ）笑わぬ美女）を愛して国を傾けたと言われます。今、我が主君が西施に執着されることは、古代の王の所業と変わらず、此の俛では国の将来が心配でなりません。どうか、政務に戻つて下さるようにお願ひ申し上げます。」——必死に懇願をしたのだが全く効き目が無かつたのである。

或る時に、呉王が西施の為に群臣を集めて宴を開いている場所へ伍子胥が正装してやつて来たのだが、飾り立てた宮殿の階段を上るのに、まるで水中を越える様な身振りで進んで来た。王の側近が怪しんで理由を尋ねると「…此の宮殿もやがて敵に滅ぼされ、草深く露重き場所となる日も遠く

は無い。それを思つて（行く末を案じて）着衣の裾を上げてゐる…」と答えた。その様に忠臣が諫めたけれども呉王が其れを聞くことは無かつた。

更に伍子胥は砥ぎたての剣を持参して呉王の前で抜き放ち、大声で言つた。「此の剣を磨くのは（国の）邪を退け、敵を追い払う為ですが、今、此の国を滅ぼす原因を探れば、いづれも（王が寵愛する）西施に有ります。そこで私が、国の害となる者の首を刎ねて国家の危機を救います！」と言ひ放ち、西施を斬ろうとした。愛人を貶（けな）された呉王は怒り、大忠臣の伍子胥を捕えて死罪にするよう命じた。伍子胥は覚悟の上であるから恐れずに言ひ放つた。

「道を誤つた主君を諫めて死するは臣下の則であるから、攻め込まれた敵と戦つて死するよりも主君の命令で死ぬことを喜ぶ。ただし是だけは言つて置くが、呉王が越に滅ぼされ敵の手で刑罰に処せられる日は是から三年を過ぎ無い。その様な姿は見たく無いので私の両眼を抉つてから此の城の東門に晒し、其の後に首を刎ねて欲しい。目が枯れる前に此の国が滅ぼされ、呉王が死刑場に連行される様子を見て気持ち晴らしたい…」

是だけ言われれば呉王の怒りも増すので、伍子胥は処刑された後に磔刑（はりつけ）にされた。その結果、呉の国では国王が何をしても諫める家が居なくなつたのである。

此の情報は越の国にも伝わつたから范蠡は「時節到来」と二十万騎の兵を率いて呉の国へ押し寄せたのだが、その時期の呉は服属していた晋国が背いた為に国王夫差が渋々出陣して守備防衛が全く手薄になつてゐた、と言うより国土を護る軍勢が一人も居なかつたのである。

范蠡は、留守番をしていた西施を先ず取り返しから呉国の宮殿を焼き払つた。周辺国の斎と楚両国も軍勢を出して范蠡に協力したらしい。此の知らせを聞いた呉王は、晋国との戦いを放り出して故国に引き返し越国と対戦したのだが、馬鹿にされた晋の軍勢は怒つて追い掛けて来たから周りは全部が敵になつてしまつた。

前方には越・斎・楚の軍勢が雲霞のごとく待ち構えており後方には強国・晋の大軍が居る。呉軍に逃げ場は無いので死を覚悟して戦うこと三日三晩に及び、范蠡は軍勢を入れ替えて息もつがぜずに攻め寄せて呉軍三万余を討つた。呉王も三十数度戦つて回りをみると従う者は百騎しか居ない。其の状態で真夜中に敵の包圍網を突破し、何とか生き残つた六十七騎で姑蘇山と言う山に登つてから敵の越王に使者を送つて申し入れた。

「昔、貴方が会稽山で苦しんだ時に私が助けあげた。其の恩を考えれば、今は私が助けられる番である。聞き届けて貰えるならば、今後は呉の国は越国の臣となるう…どうか許して欲しい」此の手紙を見た越王は気の毒に思い、呉王を捕らえても命は助けようと思つたのである。

此の話聞いた范蠡は、直ちに越王の許に行き敵しい言葉で「鎌の柄を切るときは自分が使い易い長さで切ります。会稽の事は呉の国に天が味方をしました。今は越の国が天運を得ております。此の時を生かさなければ越は再び害を受けるでしょう…」と決断を迫つたのである。しかし越王が躊躇してゐたので、范蠡は呉国の使者が帰らぬ先に軍勢を進めて呉王を捕虜にした。

頭から袋でも被せられたのであろうか、周囲が見え無い状態で呉王が自分の国の東門から連行さ

れるときに、呉王を諫めて斬られ城門の旗竿に晒されていた忠臣・伍子胥の首の両眼だけが「だから言つたでしょう」とばかりに笑つてゐた。是を見た呉王は、さすがに恥ずかしく思い、袖で顔を隠し、頭を下げて其処を通り抜けた。呉の兵たちは是を見て涙を流した。呉王は獄に投ぜられ会稽山の麓で処刑されたのである。俗に「会稽の恥を雪ぐ（そそぐ）」とは此の事を言うのであろう。

此の後は越王が呉を併合しただけで無く、晋・楚・斎・秦を平定して覇者となつた。其の功績に依り范蠡は萬戸侯（多くの領地を有する高官）に封じられる事になつたのだが、是を受けず「久しく功成り名遂げて身退くは天の道なり」と言つて姓名を変え、陶朱公（とうしゅこう）と呼ばれて五湖と言う僻地に隠棲した。

話を日本に戻すと、児島高德は学の有るところを誇示して中国大陸の歴史を引き合ひに自分の忠誠心を強調したのであろうが、いづれも権力争いに過ぎ無いのであるから庶民にはどうでも良い。後醍醐天皇は出雲の三尾湊に十日程留め置かれてから隠岐の島へ流された。それも大袈裟に三百余の船で都を出てから二十六日もかかつたらしい。隠岐を支配する佐々木貞清が国府島という場所に御所と言う名の牢屋を造り皇居の替わりにした。仕えるのは六条少将忠頼、頭大夫行房、と三位殿という女房だけである。皇居に比べれば粗末だが罪人なので贅沢は言つていられない。当然、警護（監視）の武士は付く。それでも天皇は朝夕の儀式を怠らなかつた。（何の役にも立たないが…）

天皇制が導入されてから此の様な出来事は聞かない。日も月も其れを恥じてゐるのであろうし草や木も悲しんで花開くことを忘れろと思ふ。 続く